

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS ～ 孤独の歌 ～

灯火

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～孤独の歌～

### 【Nコード】

N6348Z

### 【作者名】

灯火

### 【あらすじ】

30年間の人生に幕を閉じた…はずだったんだけど…  
前世とは違う人生、前世とは違う容姿、前世と変わらない境遇、目的もなく、目標もない、そんな空っぽな2度目の人生。  
けど…そんな中、出会った少女の笑顔は…なんだか…暖かった。

## 第一話「人生30年？」（前書き）

小説を書くのは初めての上、作者はリリカルなのはをそこまで深く分かってないので、多々至らない点がありますが、よろしくお願いします。

## 第一話「人生30年？」

仕事の帰り、ふと考えた…

生まれてそろそろ30年、俺はいつたい何をしているんだろうか？

仕事内容以外で誰かと最後にしゃべったのは、いつだっただろうか？

家族…は初めからいなかった、友達…は作らなかったのか作れなかったのか、まあ存在した覚えはない。

夢…特にない、趣味…特にない、目標…立てたことがない、ただ毎日仕事に行つて、帰つて、寝る。

毎日毎日それを繰り返すだけ…あれ？なんのために俺、生きてるんだろう？

「人間元来一人で生まれて一人で死んでいくのである」ってのは、誰の言葉だったか？

…うん

…死のう。

でもどうやって死ねばいいんだ？

出来ることなら楽に死にたい、苦しんだりせずに一瞬で…

そんな事を考えながら歩いていると、ふと目の前の横断歩道に少女が見える、信号は…赤い色で、馬鹿みたいなスピードで車が走ってきていた。

意識する前に、体は動いて、少女を車の前から突き飛ばした。

眼前にゆっくりとスローモーションのように迫る車、法定速度って、守る奴いるのかな？

頭に浮かぶのは、今までの人生…あれ？…これ背景違っただけであんなま変わんねえぞ？

…まあでも、このスピードなら痛みを感じる暇もないだろう。

ある意味、よかったのかな？

そんな事を考えながら、俺の人生は幕を閉じた。

…はず…だったんだけど…

## 第一話「人生30年？」（後書き）

導入編？

はじめての小説におっかなびつくりで…Orz

## 第二話「魔法都市？」（前書き）

導入編は4話までの予定です。

出生、転機となる場面までは、できるだけ詳しく書きたいのでご了承ください。

## 第二話「魔法都市？」

——真っ暗だ。

俺。どうしたんだっけ？

確か…仕事の帰りに死のうと思い立ち、んで幼…女の子をかばって車に…

俺死んだよな？うん、あのスピードの車と衝突したんだし死ぬはうだよな？…ね？

——ここが死後の世界ってやつなのかな？

なんかイメージと違う。

頭を整理しながら、考える…

死のうと思ってすぐ死ねた、しかも痛みを感じる間もなく、これは神様に感謝しないといけないな…俺無神論者だけど…神様ありがとう！！

しかし誤算が一つ、

——死んでも意識がある——

これには正直困った、死んだら意識なんかなく何も感じなくなるんだとばかり思っていたが、意識はしっかりしてるし、なんか生温か

いし、息苦しい……うん？

息苦しい？んなばかな、何で死んでるのに息苦しい？死んでも呼吸  
ってするのかな？

——しないよな？

予想と違う状態に戸惑う俺、さらに追い打ちをかけるようにいきな  
り全身が絞め付けられた。

「——！？！？」

痛い、とんでもなく痛い、痛みも感じるのか！

声も出ない！

何かに引っ張られるような感覚、急に辺りが眩しくなった。

「もう少しですよ！頑張って！」

——なにを？

「今頭が出てきましたよ！もう一息です！」

——頭？なんの？

「赤ちゃんも頑張って！もうすぐ出られるからね！」



そして、自分のことで頭がいっぱいだった俺は、母親であろう人物の複雑な表情に気が付いていなかった…

——新生児室——

あれから、丸一日たった。俺ははまだ整理のつかない頭で状況を確認していた。

？俺は猛スピードの車に轢かれて死んだ…はず

？ただどなぜか生きていて、体は赤ん坊になっている

？転生？

？プレートに書いてある文字が読めない…てか何語？周りの機械も見たことないし…

？なんか眼がチカチカするっていうか、変なオーラが見える

？俺の母親であろう人物は一度も俺を抱いていない（てか顔もろくに見てない？）

まあ…？はどうでもいいとして、重要なのは？…？だ。

まず、？…認めたくないが、状況的に転生って考えるのが一番しっくりくる。

次に、？…見たこともない文字ってことは、ここは外国？でもしゃべってる言葉は普通に聞き取れる。  
となると考えられるのは…別の世界？

最後に、？…これが一番の問題だ、なんかハウスダストのCMみたいな、なんて表現したらいいのか、細かい粒みたいなものが空にたくさん浮いている。でも触ろうとしても触れない…なにこれ？

そしてなんか、看護師もそうだけど周りの赤ん坊もなんか、いろいろな色のオーラ？…ってか光の膜みたいなのに包まれてる、てか俺も包まれてる…色は薄緑。

死ぬ前に、こんなものが見えた覚えはないから、過去に戻った。とかではなくまったくの新しい体と考えるのしかない。

よし、まとめよう…つまりは…

俺は人生に絶望して死にました でも神様の気まぐれで前世の記憶を持ったまま転生しました しかもここはどうやら前住んでたところとは違う世界っぽい しかも変なものが見える目のおまけつきだ  
神様ってやつは…俺が嫌いなようだ もうやだ…この人生…

——それからさらに、4日たった。

ケージの前に誰がいる、誰？この女の人

疑問に思っていると、近くにいた看護師が女性に声をかけた。

「退院ですね、外は暗いので気を付けてくださいね」

「——はい、お世話になりました。」

ああ、こいつ母親か…初めて見たよ顔、変なオーラ？は緑色ね、はいはい一緒一緒。

そのまま俺は、母親？に抱かれて病院を後にする。

——で、現在なんかどっかの建物の前にいる。時刻は深夜。

なんか門にプレートが貼ってあるってことは、何かの施設かな？…読めないけど。

で、この母親？かごに入れた俺を、門の前に置いて泣きながら何か言ってる。

「——だから、ごめんね…ごめんね…貴方が悪いんじゃないのよ、あいつが…悪いの…」

えと…つまりは、どっかの男と子作り 捨てられた もう出産拒否できない日数がたっていた でもこの子を見ているとあの男を思い出すから一緒にはいられない 全部その男のせいだから、怨むならそいつを恨んで

——知らんがな。

というか、今回の俺は特殊な例として、物心ついてない赤ん坊に何言っただって覚えてないだろう。

じゃあ、何のために？そんなの決まってる自分を正当化するためだ……うぜえ。

前の世界の母親も…そうだったのかな？生まれたばかりの俺に、自分を慰めるための言い訳を並べて、捨てて行ったのかな？

——何かすげえ腹が立つ。怒鳴り散らしてやりたいが、悲しいかな「オギヤア」ぐらいしか言えない身…転生したっていうのに、前と何も変わらない状況…いや、捨てられる様を認識できる分、今のほうが悪いか。

そして戯言を並べ終わった、母親？…いやもうどつかのおばさんは去って行った。

一人残された俺は、これからの事を考えていた。まあロクな施設じゃないよな…経験上

——こうして、俺の2度目の人生は幕を開けた…けど、もう幕降ろしてえよ…

## 第二話「魔法都市？」（後書き）

話があったように進まない（；、D、）

2話目で原作キャラの一人も出てこない体たらくORZ

小説書くのって難しいな；；

次回いよいよ原作キャラも登場して「なのは」らしくなってくる…かな？

### 第三話「出会い？」

——自分を生んだおばさんに、孤児院の前に捨てられて7度目の夏

ジリリリリリ！！

カチ！

枕元の目覚ましが鳴り、目を覚ます。体を起こし辺りを見回す。

お化け屋敷みたいな安アパート、必要最低限の物しかない狭い部屋  
…ここが、今の俺の住処だった。

俺の引き取られた（捨てられた）孤児院は「エルザード孤児院」という個人経営の孤児院だった。…いや別にダジャレじゃねえよ？

どうやら、この国？「ミッドチルダ」という場所では孤児育成に対し、多額支援金が降りるらしい。孤児の育成に力を入れているのか？それとも孤児が量産されるほど危なっかしい世界なのか？まあ詳細はよく分からないが、ともあれ孤児を引き取っている施設には支援金が支払われる。

勘のいい人なら気付くだろーが、俺が引き取られた孤児院は、経営者が楽して稼ぎたいがためだけに作られた施設だった。

孤児を拾い、最低限の食事だけ与えて育てる、残ったお金は懐に入れて、成長した子供には家事をさせる。新しい孤児が来れば、その成長した孤児に育てさせる…といった感じだ。

実際俺の育児（世話？）をしてくれたのも10歳に満たないであろう子供だった。

この世界の常識なんかについても、その子供やほかの子供に教わった。

この「ミッドチルダ」という世界では、魔法が日常的に使われてる世界らしい。

初めて聞いた時は、鼻で笑いそうになったが、残念なことに事実っぽい…ただ、この世界の魔法は俺のイメージしていたそれとは違って、超科学的な物みたいだった。

そして、魔法について知ると同時に、俺の目についてもようやく分かってきた。どうやら俺の目は、空気中の「魔素」や人の持っている魔力、という物が目視できるようだった。

まあ見えたからどうというわけでもなく、4歳になってようやく自分の意思で切り替えられるようになるまでは、目がチカチカしてしようになかった。

そついった感じに、この世界について知るにはこそこそ役に立った…精神的にはもう立ち直れないかもしれない…意識がある状態で赤ん坊とか…マジ拷問…

しかしそんな孤児院も、5歳になったところに金だけ盗んで逃げだし

た。

正直、気持ちが悪かった…他人を利用することしか考えてない経営者、影で不平不満を言うただけでなにもせず、空から恵みが降ってくるのを待つだけの餓鬼共。…まあ逃げ出す時に、「時空管理局?」とかいう軍隊みたいなところに通報しといたし、まあなんかあるんじゃない?

逃げ出した後も、この世界については驚かされた。まず仕事、なんか今の俺と同じぐらいの歳…10歳にもなっていないような子供たちが、普通に働いてたりする…どうなってんだ?労働基準

そして、「時空管理局」という軍隊みたいな組織、なんか10歳ぐらいの女の子が街頭のテレビにエースとして映っていた。

これなら俺も職に就けそう、とか思ったんだけど…この世界にも履歴書はあるみたいだった。子供でも履歴書を持参しないと雇用してくれないらしい…なんでそんなとこだけしっかりしてるんだ?

つまり、こっちの世界での自分の名前すら分らない俺は、もちろん論外、しょうがないので残飯漁って腹を満たし、公園で寝る生活を繰り返した…なんというホームレス。

孤児院から盗んだお金は、まだあったが…いざという時のために取っておいた。

それで、いつ頃だったか…まあ慣れた手つきでゴミを漁ってる時に、ふと見つけた壊れた機械、見た感じテレビの様な物。

前世では、何を隠そう家電製品の修理の会社に14年間勤めていた俺（孤児院を出ないといけない年齢が16歳だったから）もしかして直せるんじゃないかと中を見て見ると、元居た世界と殆ど変わらない構造だった。

これは金になる！って考えた俺は、取っておいたお金で部品や工具類を買って、捨てられている機械を片っ端から集めて回った。

中には構造がさっぱりな物もいくつかあったが、家電製品類は概ね元の世界と同じような感じだった。

その後、俺は直した家電品を安値で販売、と同時に家電類の修理を請け負う小さなお店の様な物を始めた。場所はいつも寝ていた公園で、レジャーシート引いただけの小汚い店だった。

しかし、意外なことにこの世界の人たちは、財布の紐が緩いのか？子供が売ってるのを見て同情する偽善者ばかりなのか知らないが、店はそこそこ繁盛していた。

しかしそうになると、困った問題も出てきて、先に挙げた構造がさっぱりわからない機械類の修理も出来ないか？と聞かれることが多くなってきた。

出来ないって答えても、大抵は子供なので問題なかったが、それで客足が遠のいては困るので、稼いだお金で本屋へ行き、いろいろな機械類の本を買い勉強した。その甲斐あって、家電品はもちろん、

簡単な構造をしている物なら、魔導師たちが使う「デバイス」という物も修理できるようになってきた。

そうなると今度は、やたらめったら「デバイス」の修理の頼まれることが多くなってきた。簡単なものなら修理は出来たが、複雑な「カートリッジ」などを搭載している物はお手上げだったので、また本を買って商売の合間に勉強した。

おかげで、5歳の頃から2年たった今は、生活するだけなら不自由なく暮らせるぐらいは稼げるようになっていた。

ただ…そんな俺を最近悩ませている奴が…一人

「こんにちわ、今日もお店頑張ってるんだね」

そう言つて、店の前にしゃがむ金髪の女性、ロングの金髪を緩く後ろで結んだその子は、10人に聞けば9人以上は美少女と答えるであろう容姿をしていた。

「……またあなたですか」

俺は感情のこもっていない声で答える。

「うーん、だめだよ？お客さんなんだしもつと愛想良くしないとね」

「……毎日、商品もロクに見ず話だけ振ってくる人お客なんて呼びません」

そう、これが最近の俺の悩みの種だった…この女性、フェルトだったかフェイトだったか？

まあとにかく、最近毎日来てはくだらない話を振ってくるだけで、なにも買わずに帰っていく。しかも、話す内容は「家族はいないの？」とか「何か困ってない？」とかそんな、どこかの保護官みたいなセリフばかりだった。

「でも、いつも寂しそうな顔してるよ？私でよければ相談に乗るよ？」

何の見返りも求めず、差し伸べられる優しさはただ単純に気味が悪かった…

「……あなたが、帰ってくれば元気になりますよ」

感情のこもってない声で返す。

「その…話したくないなら無理にとは言わないけど…でもね、人は一人では生きられないんだから、もし何か辛いことがあったら…私じゃなくてもいいから友達とかにでもいいから、話してみて…ね？」

…？

「……え？……生きていくのに、他人って…必要？」

「——！！？」

ふと、疑問に思ったので聞いてみただけだった。

すると少女は、何か驚いたような目をして固まっていた…俺何か変なこと言ったか？

「う、ごめん…また、来るね…じゃあ」

そう言っで、走り去っていた…別にもう来なくてもいい。

フエイトSide

「こんにちわ、今日もお店頑張ってるんだね」

私は、いろいろな機械が並べられているシートの前に座り、その店主である少年に声をかけた。

「……またあなたですか」

返ってきたのは、少しも感情のこもってない声、この子を見つけたのはいつだったろうか…

仕事の帰りに立ち寄った公園で、一人シートの前に座っていた少年、たぶん年齢は私より少しだけ下ぐらい、ボロボロの服を着て、まったく切っていないように見えるボサボサの長い髪、元は銀なのだろ

うけど汚れて灰色にみえる髪の色、まるで世界から一人切り離されたような寂しげな眼をしていたその子を、ほおっておけなくて声をかけたのが確か最初。

なんだか…なのはに会おう前の自分を思い出してしまいそうな目だった。

それから、少しでも心を開く手伝いになればと思って、仕事の合間にたびたび訪れているけど、心を開くどころか、うっとおしく思われてそうだ。

でも…それでも私と話すことで、少しでも寂しさが紛れているといんだけど…

そんなことを考えながら、出来るだけ明るい声で返す。

「うーん、だめだよ？お客さんなんだしもっと愛想良くしないとね」

「……毎日、商品もロクに見ず話だけ振ってくる人お客なんて呼びません」

…痛いところを突かれた、確かに営業妨害かも…で、でも仕事の途中で寄ることが多くて、何かを買って持つていくわけにもいかないし…それにたぶん何か買ったら、追い返されそう…

「でも、いつも寂しそうな顔してるよ？私でよければ相談に乗るよ？」

少しでも、この子のことが知りたくて、何か話してくれれば何かしてあげられそうなのに…

「……あなたが、帰ってくれば元気になりますよ」

うう…今の言葉は少し、いや結構堪えた…そ、そんな敵意をストリートに向けられると、けどここで諦めたくなくて…

「その…話したくないなら無理にとは言わないけど…でもね、人は一人では生きられないんだから、もし何か辛いことがあったら…私じゃなくてもいいから友達とかにでもいいから、話してみて…ね？」

そう…これは私がこの数年で学んだこと、一人でいる限り、辛さや寂しさはなくならない…誰かに少しだけ話すだけでも、楽になることだって…いっぱいあるんだよ？

「……え？……生きていくのに、他人って…必要？」

「——！！？」

返ってきたのは、いつも通りの感情のない声…向けられた目は、まるで…この世界に何も期待していないような、まるで何十年も経て悟ったかのような、冷たい…とても冷たい目をしていた。

「じ、ごめん…また、来るね…じゃあ」

その場に、居続けることができなかった。あんな目を見たのは初めてだった…

私が…が考えてたよりも…あの子の闇は大きいのかもしれない…そう、なんだか…死にたがっているようにすら見えた…

### 第三話「出会い?」(後書き)

やっと原作キャラの登場で「なのは」らしくなってきたかな?  
…まだかORZ

次が導入編の最終話です、その後舞台はStrikersへと移ります。

#### 第四話「転機？」（前書き）

導入編ラストです、やっと主人公の名前が明かされます。

#### 第四話「転機？」

——望まないまま幕を開けた第二の人生、前世と変わらない一人ぼっちの人生のほずが…

「——って訳で、やっぱり一人のままじゃ出来ないことも多いと思うんだ」

「……その考えは否定しませんし、正しいとも思いますが、俺には関係ないです」

感情なく返した言葉に苦笑いするのは、ここ最近しょっちゅう来る常連の冷やかしの…もとい今は客の、「フェイト・テストロッサ・ハラウン」（執務官試験に向け勉強中）。

…なんで、ファミリーネーム2つあんの？ミドルネームってやつかな？よくわかんね。てか、毎日こんなとこ来て勉強はいいのか？てか試験で筆記とかなのかな？まあ、興味はないけど。

まあ、ともあれこのフェイトさん（今は一応年上なので）毎日毎日うちの店？に来ては、保護官みたいな世間話ばかりしている。

「やっぱり、手際がいいね。その歳でそこまでできるなんてすごいよ！」

「……まあ、これが仕事ですからね」

現在俺は、このフェイトさんのデバイスの清掃メンテをしている。  
あまりに毎日来るので、昨日「冷やかしながらもつくんな!!」的な  
ことを言ったら、今日来るなり頼まれた。

てか…なんだこのデバイス、インテリジェントデバイスにベルカ式  
カートリッジシステム、最近急速に進んでる研究ってのは知ってた  
けど、実物見たのは初めてだ。

繊細なインテリジェントデバイスに、カートリッジシステムは相性  
が悪く、研究はされているが流通している物は、殆どアームドデバ  
イス形式のはずだ。

しかしこのデバイスは、それを全く感じさせない。しかも、そのカ  
ートリッジもミッド式ではなくベルカ式、内部の構造も見たことな  
いような高級パーツがふんだんに使われてて、まさに『一人のため  
に作られた傑作』とでも言える出来だった。

このデバイス設計した奴、どんな頭の構造してんだ…てかこんなの、  
公園で露店してる子供にメンテ頼むって、どういうことだ。まあす  
ごい勉強にはなるが…

「あ、そういえばこの間、地球の海鳴市で美味しいケーキ屋さんを  
見つけてね——」

また来た、地球の話題。いつだったか、話の中で地球という単語が  
出てきて、つい反射的に反応して、「自分も地球の事をそれなりに  
知っています」みたいなことを言ってしまった。

それからというものの、まるで攻め込む隙を見つけた!とでもいうよ  
うな勢いで、毎日地球の話題を話してくる。地球の友達の話、最近

あった出来事、地球の食べ物、よくまあ話題が続くもんだと感心する。

しかし、話を聞く限り、どうもこの世界の地球は俺の居た地球とはどこか違うような印象だった。…いちいち話したりはしないけど…

「ねえ…そろそろさ、えと…名前、教えてくれると…嬉しいんだけど…」

名前？そういえば考えてなかった。この世界での本当の名前は、俺は知らない。前世の名前は完全に日本人の名前「ミッドチルダでは珍しい。アパート借りる時、不思議そうな顔されたもんね…」

それから、聞かれることなんて無かったから…考えてなかった。とりあえずここはシカトだ。

そんなことを考えてる内に、メンテは終わった（てかすることなんて殆ど無かった）

「……はい、終わりましたよ」

余計なことは言わない、食いついてきても面倒だし…

「ありがとう！…えといくらになるかな？」

「……500です」

「え？それはいくらなんでも安すぎない？普通の専門店の3分の1くらいだけど…」

「……子供の露店で客を呼ぶには、安さぐらいしか武器はないですからね」

「そっか…えと…細かいのは…」

——ピピピ！

フェイトさんがお金を探そうとしていると、何やら通信が？

「ごめん！ちょっとまってね」

そう言つて、通信するフェイトさん。が、次第にその顔は青ざめ…  
というか蒼白といえるくらいに変わっていく。

「…うそ、なのはが…そんな…」

なのは？えと、確か地球の友達で管理局のエース様だったっけか？

「うん！すぐ行く…場所は？…うん分かった！」

焦ってる様子なので、声をかける。

「……急ぐんですね？お金はどうせまた来るんでしょうし次会ったときでいいですよ」

「——！？ごめん！！ありがとう！！また来るから！！今度来た時には、名前教えてね！！」

矢継ぎ早にそう言つて、ものすごいスピードで走って行った。…まあどうせまたすぐ来るだろう。

「……名前、考えとかないとな……」

——それから少しして、管理局のエースが撃墜されたという噂を聞くようになった、そしてその後フェイトさんと再開するのは8年後だった——

フェイトさんが、走り去った後……いつも通りシートの前に座っていると……

「返して！！返してよぉー！！」

という、喧しい声が聞こえてきた。

声のしたほうに目をやると、今の俺と同じ年ぐらいの少年3人、青い髪の少女1人が何か言い争っていた。

「ここは俺様のナワバリなんだから、入ってきたてめえが悪いんだよー！」

小太りの少年が、ポーチだか鞆だかそんなものを振り回しながら、訳のわからないことを言っている。ナワバリって……お前はどこのライオンか？

「うう…返してえ…」

少女の方は、完全に泣きだし同じセリフを繰り返すだけ…

…うるせえ…喧嘩ならよそでやれよ。

「おいそこのお前！何じろじろ見てんだよ！！」

小太りの後ろに居た少年…仮に子分Aとする。その、子分Aがこちらに気付いたのか声を張る。

「あゝん？てめえ…なんか文句でもあんのか？」

小太りがこちらに近づいてきて、俺の胸倉を掴んで、旧時代のチンピラみたいなセリフを吐いた。

「俺様は——ふぎやあ！？」

顔が近かったので、とりあえず殴った。

「て、てめえ…い、いきなり何しやが——るふあ！？」

尻もち付いて、涙目で何か言ってきたので、次は顔を蹴った。涙を流しながら、子分A、B共々怯えた目でこっちを見ている。まあ当然の反応か…

「……やかましい、失せろ……もう一回殴るぞ？」

とりあえず退場いただく。「もう一回殴る」の部分にビク！っと

した小太りは、慌てたように走り去って行った…子分A、Bははるか前方を走ってた。…人望ねえな小太り…

騒音の現況が走り去った後、俺の足元にはさつき小太りが振り回してたポーチのようなものが、落ちていた。

「えう…そ、それ…」

青い髪の少女がこっちを見て、涙目で何か言おうとしている。…ああ、これこいつのか。

「……ほら」

ポーチ？を拾い上げて、その少女に渡し、俺はいつものシートの前に戻る。

騒音の元は、去ったしこれでいつもの日常が返ってきた。

………さっきの少女が隣に座って、こっちを見ている以外は！！

なんだ？この状況、なんか文句があるのかこいつ…ああ、あれか？実はさっきの小太り達は友達で、お遊びでやってましたとかそんなのか？…だとしてもうるさいお前らが悪い。

「あ…あの…」

やはり何か言いたいことがあるようで、こつちをチラチラ見ては顔を伏せる少女。

「……なんだよ？何か言いたいことがあるのか？」

とりあえず、聞いてみる。もし文句だったら、適当に怒鳴ればどっかいくだろ…

「あの…その…ポーチ…あ、ありがとう…」

…は？

「取り返してくれて…ありがとう」

ああ、こいつには今は、俺がこいつのためにポーチを取り返したように見えたのか、絡んできたから追っ払っただけで、割って入る気なんてなかったんだが…

「……商売の邪魔だった奴を、追っ払っただけだ助けたわけじゃねえよ」

「…お店、やってるの？」

…失言だった。少女はシートの上に置かれた商品を、珍しげな眼で眺め始める。

まずい…居つかれる前に逃げないと…！

「……そうだけど、もう今日は店じまい」

物を片付け、撤退の準備をしようとする。

「ホント!？」

なぜか嬉しそうな少女。

「じゃあ!一緒に遊ばし！」

「……は？」

一緒に遊ぶ?何言ってるんだこいつ…確かに見た目は同じ年ぐらいだが、精神的にはもう37歳な訳だし…正直嫌だ…

「……いやだね、俺はもう帰る……」

断りの言葉を言おうとした瞬間、涙目になる少女。

「うう…いつしよに…あそぼ…」

「……いやだから、俺は……」

「…いつしよ…ぐす…あそ…ぼ」

「……」

こいつ、捨てられた子犬のような目で…

「いつしよに…」

「……ああもう！分かったよ遊べばいいんだろ！遊んでやるから泣くな！」

泣きだされても困るので、俺はしょうがなく折れた。…てか…あの目は…無理。

「ホント！！やった〜！！」

とたん、さっきまでの顔はどこへ行ったか笑顔になる少女。噓泣き…だと…そんな高等技術をこの歳で…

「……はあ、とにかく商品を一度家に置いてからな！」

最後の抵抗、一人で帰れたら逃げよう。

「うん！ついてく〜」

…さいですか。

がつくりと肩を落として歩く俺、後ろを楽しそうについてくる少女…どうしてこうなった？

「あー！そういえば…」

少女が何かに気付いたように声を上げた。

「………今度はなんだ？」

「名前！」

「……はい？」

「お名前、教えて」

名前…そういえば考えてなかったわ。ええっと…名前…名前…

「……コウタ」

「こつた？」

とりあえず、前の世界での名前を名乗った。あとはええっと…ファ  
ミリーネーム…は…

「……コウタ…コウタ・エルザード…」

とりあえず、孤児院の名前から取った。バランス悪いが、まあどう  
せ今日限りだしこれでいいよな。

「コウタ」

嬉しそうに俺の名前を呼ぶ少女。

「コウタ！私の名前はね——」

——思えば、これが始りだったのかもしれない、俺の…第二の  
人生の——

人通りの少ない公園、そこに佇む一人の少女。

「…今日も…いない…か、どうしたんだろう？」

ここ数週間と同じように、少女は誰かを探し辺りを見渡す。

「お店…やめちゃったのかな？…それとも別の場所に変わったのかな？」

そう呟く少女の背中が、どこか寂しげで、

「お金…まだ払えてないよ…名前も教えてもらってない、私はあの子を助けてあげられなかったのかな？」

その問いに、答える人はいなく夕暮れ時の公園には静かな風だけが吹いていた。

「また…どこかで会えたらいいな…」

そう呟き少女は、風になびく金髪を押えながら、公園を後にした。

——そう、少女は知らなかった。彼女の探している少年は、偶然知り合った青い髪の少女のワガママに付き合わされ、ここ数週間露店を出せずあちこち連れまわされていたことを…二人が再び出会うのは、今から8年後——

#### 第四話「転機？」（後書き）

やっと導入編が終わりましたORZ

次回より原作のストーリーに入っていきます。

基本的に原作に沿って、進んでいく予定ですがところどころ変えていきます。

今回は8年たち、主人公の性格が激変しますが、その辺の間の8年間はストーリーの中で入れていきます。

## 主人公設定（十七話時点）（前書き）

箇条書きにて、主人公設定

話が進むごとに更新します。

12/30主人公のデバイス設定を更新…変更するかもです

## 主人公設定（十七話時点）

プロフィール（十三話時点）

名前：コウタ・エルザード（旧名：村山幸太）

年齢：15歳（前世の享年30歳）

身長：174cm

体重：70kg

魔力ランク：A-

魔導師ランク：陸戦C B

魔力光：薄緑

階級：二等陸士

所属：機動六課ライティング分隊  
コールサインはライティング05

術式：ミッド式

ポジション：オールラウンダー（射撃寄り）

得意な事：魔力収束・魔力操作（形状の変化・圧縮など）

苦手な事：魔力の瞬間大量放出（瞬間的に多量の魔力を放出する砲撃魔法などが使えない・収束魔法もしかり）・魔力の遠隔操作

レアスキル：魔力・魔素を目視出来る目（切り替え可能）？

所持資格：大型二輪免許、機械設計技術士2級、エネルギー管理士、危険物取扱

趣味：強いて挙げるなら料理（食べるのはほぼスバル）

特技：機械いじり

好きな物：友達、仲間

嫌いな物：自分、神様

リリカルなのはの世界に転生した主人公、当初は枯れた性格をしていたが、8年間で心境の変化があり現在は丸くなっている。

魔力操作・魔力収束については、天賦の才を持っているが、魔力の瞬間大量放出が苦手なため、強力な魔法がまともに使えず、高めの魔力量は宝の持ち腐れ。（Bランク相当の魔法は、発動するまで普通の倍ぐらい時間がかかる・Aランク以上なら3倍以上）

上記の理由のため、収束はできても発射の「瞬間」に多量な魔力が必要な収束魔法・砲撃魔法は使用できない。

また、魔力の遠隔操作も苦手なため、誘導弾・フェイクシルエツトなどの遠距離操作魔法も使えない。

その為、魔力を圧縮することで威力を、加速魔法を組み込み、速度・連射を上げることで命中力を上げている。デバイスの補助により誘導性・発動にかかる時間はある程度解消された。

目下の悩みは、火力不足

転生前は、なかなかハードな人生を歩んできたため、自分に対して損得勘定なく向けられる好意や優しさが苦手。

前世を通して初めて「絆」と呼べるものを手にしたせいか、友達や仲間を大切にしている、感情の機微にもよく気がつきフォローなどもするが、自分の事や気持は他人には話さない。

本人曰く「目的も、目標もない」ため、昇進やランクアップに対しては興味がなく、約5年前に自身に誓った想いだけで魔導師を目指した。

スバルとは7歳の頃からの幼馴染とっていい関係で、昔からワガママに振り回されている。

ティアナ曰く「スバルに弱い」。

普段はめんどくさいなどやる気のない発言ばかりをしているが、実

際は傷つくのが怖く、予め「いやいや付き合った」などの言い訳を用意したいがために、やる気なく振舞っていて、自分でもそれを自覚しているため自分が嫌い。（根は真面目なお人好し）

前世と幼少の頃、職としていたため機械いじりが得意。

フェイトとは、幼少の頃に面識があり、そのころ取った態度について謝罪したいと思っている。

どのポジションも本職には敵わないが、それなりにこなせる為、ポジションチェンジが得意なオールラウンダー。（スバル・ティアナと組む際は主にフルバック・クロスシフトではガードウイング）オールラウンダーとして、スバルやティアナに付いていくため、訓練校の頃から毎晩自主トレを欠かさず行っている。（隠れてやっているため周りの評価は、いろいろこなせる天才）  
とある事情のため、ゲンヤとレジアス対しては頭が上がらない。

## デバイス

名称：ジェミニ

種類：インテリジェンスデバイス

人格：女性型

性格：献身的で主人公が望むのなら、体に負荷のかかるようなことも心配しながら了承する。更に主人公の力になるため、日々自身の改良プランを思案中。

形状：ショートライフルの上下に刃がついた両刃の双銃剣

カートリッジ：4発×2丁 装填式

待機モード：翡翠色のネックレス

通常モード：ワンハンドモード/ツーハンドモード

ティアのクロスミラージュと同様に、2丁・1丁どちらにでも切り替えられる。

基本的には2丁で使用。

モード2：????

フルドライブモード：????

???（主人公が自分で搭載）

オールラウンダーである主人公の補助に重点を置いたデバイス。

近距離で打ちあえる強度を保つため、重量は同サイズのデバイスよりやや重め。

魔力の圧縮・誘導性・魔力出力の補助の3点を特に意識して作っており、デバイスが単独で使う魔法も多い。

主人公は元々すべての距離で戦っていたため、モードが変わっても形状の変化はない。

主人公の魔力放出力を補うためカートリッジを多用出来るように、カートリッジは装填式。（予備の物は腰のポーチに収納）

主人公にとっては、唯一の相談相手と言っても良く、新魔法などをよく一緒に考えている。

名前の由来は主人公の誕生日が、日本の星座に当てはめると双子座のため。

## 主人公設定（十七話時点）（後書き）

魔法と分けます。

基本的に主人公はそこまで強くはないです、

攻撃力・防御力はスバルより低く

幻術・射撃ではティアナに劣り

突貫力・スピードはエリオに届かず

補助・支援ではキャラより効果が低い

といった感じになります。

後半になれば強くなつては行きますが…

後、オリジナルキャラは主人公と後1体（人間じゃない）しか出さない予定です。基本的には原作に主人公が加わるという形で進んでいきます。

## 使用魔法設定（十七話時点）

|      |         |                  |
|------|---------|------------------|
| 使用魔法 | （十七話現在） | 原作登場は。オリジナルの物は横に |
|------|---------|------------------|

### 【砲撃魔法】

なし

### 【射撃魔法】

魔力の遠距離操作が苦手なため、弾に誘導性を付与できず、すべて直射型。

魔力の最大放出量も低いので、魔力を圧縮することで威力を上げている。

デバイス『ジェミニ』のおかげで魔力圧縮にかかる時間は3分の1程度まで短縮された。

○基本的なショット系魔法（使えるだけで威力が低く、時間もかかるため改良したものを使用）

### シュートバレット改

#### 直射型

魔力の遠距離操作が苦手で、誘導性が付与できないため改良。加速系魔法の術式を応用しているため、速度と連射性能に優れる反面、火力は低い。

### ストライクシュート

#### 直射型

カートリッジ1つ消費、圧縮した魔力弾が、着弾した瞬間に爆発する。  
範囲はそこそこあるが、威力は低めのため主に仲間との同時射撃で使用。  
名称は2人の魔法に合わせる形で付けた。

### スパイラルバレット

#### 直射型

魔力で作った三角柱型の弾に、ドリルの要領で回転を加えたショット。  
貫通力・速度に優れるが、サイズはビー玉位で爆発もしないため、バリア破壊ぐらいしか使い道はない。

### ソニックバレット

#### 直射型

速度〓威力、カートリッジを2発ロードして発動する。  
様々な加速魔法の術式を応用して、音速を超える速度で圧縮した魔力弾を打ち出す。  
ただし、魔力の圧縮にかかる時間が約1分、とても実戦向きではない。

### スナイプバレット

#### 直射型

量遠距離用魔法、最大射程は約3km、カートリッジ2発ロード。  
圧縮した魔力弾にドリル回転を加え、威力よりも貫通力に特化した射撃。弾速も速い。  
ただし、魔力圧縮に約2分かかるため、使用機会は殆どない。

## ジャンクバレット

### 直射型

簡単にいえば、「スターダストフォール」の劣化版。

サイズの小さい瓦礫などを加速させて打ち出すだけの魔法。

打ち出せるサイズは最大で掌に収まるくらいまで。AMF対策に開発。

### 【近接魔法】

#### スパイラルランス

デバイスの先に、魔力を螺旋回転させ貫通力を高める魔法。フィールド貫通効果などはない。

### 【幻術魔法】

#### 。オプティックハイド

術者と術者に接触した対象を透明にし、見えなくする幻術魔法。

### 【防御魔法】

#### 。基本のプロテクション・シールド

#### 。アクティブガード

低速の爆風を発生させ、対象の速度を減衰させたり、柔らかく受け

止める。

爆発の規模等は、目算で調整する。

○ホールディングネット

網状の魔法で対象をキャッチする。

#### 【捕獲魔法】

○リングバインド

基礎的なバインド魔法。

#### 【補助魔法】

○フィジカルヒール

軽傷を直す程度の回復呪文、コウタはあまり得意でないため時間がかかる。

○フィールドインベイド以外の基本ブースト系魔法

ブーストアップ・ジャンプ

脚力を強化する補助魔法。

主にジャンプで移動する際に使用。

#### 【召喚魔法】

無機物召喚は操作が単純なため可能だが、無機物操作はデバイス任せのため、狙い通り動くかどうかはデバイスとの信頼関係次第。生物の召喚は『召喚するだけ』なら可能だが、指示・操作などが複

雑で、デバイス単体ではできないため、召喚獣が好き勝手に暴れる危険があるので使用しない。（というか、どうやって召喚獣と契約を結べばいいのか分らない）

キャラ曰く『相手が全面的に協力』という意味を持っているなら言葉だけで使役できるらしい。

#### ○錬鉄召喚

キャラに教わって覚えた魔法。初めは召喚は出来ても、召喚した鎖を操作することができず何の役にも立たなかったが、デバイスに操作を一任し可能になった。

詠唱が必要な魔法のため、デバイス単体で使用はできない。

### 【移動魔法】

#### 浮遊

魔力によってその場で10cmほど浮くだけの魔法。

移動はできない、スバルに引っ張って移動してもらう際に使用。

#### ○ソニックムーブ

あたかも瞬間移動したかのように見えるほど、高速の移動を行う。

#### ○ブリッツアクション

腕の振りやフットワーク等の体全体の動作を高速化するための魔法。近接戦闘の際に使用することが多い。

## 使用魔法設定（十七話時点）（後書き）

主人公は魔力量は多いですが、瞬間的に引き出せる魔力が人より少ないため、発射の瞬間に大量の魔力を消費する、収束・砲撃魔法が使えず、人より多めの魔力量も魔力切れがしにくい程度にしか、扱えてないという設定です。

その為、通常の魔法を得意な魔力の圧縮により、密度を高め強度と威力を上げています。しかし全体的に、弾は小さく火力に欠けます  
具体的にはこの時点で？型のガジェットと戦うと、ほぼ打つ手がないです。

## 第五話「試験?」(前書き)

いよいよ原作ストーリーに入ってきました。

しかし長いので分割します。

## 第五話「試験?」

——ミッドチルダ臨海第8空港近隣——

破棄された都市街のビルの屋上に、3人の男女がいた。

一人は、足にローラー、腕にナツクルを付け、すさまじいスピードでシャドーをする、青い髪の少女。

一人は、拳銃型のデバイスを持ち、落ち着いた様子で調整している、オレンジの髪の少女。

一人は、ショートライフルの上下に刃が付いたような銃剣を、柵に立てかけ『ワガママ女性の対処法』試験編』と書かれた本を読んでいる少年。

3人は、三者三様の状態で、これから始まる「試験」を待っていた。

「…スバル、あんまり暴れてると、本番でそのオンボロローラーいっちゃうわよ？」

「ティアく嫌なこと言わないでえ、大丈夫だよ！ちゃんとこの日に備えてコウタにデバイスのフルメンテしてもらったもん！…ね？コウタ」

そう言つてこちらを向くのは、俺の幼馴染「スバル・ナカジマ」…ワガママな怪力女だ。思えばここ8年間の苦難等は、8割近くこいつが原因だった気がする。

俺は、手に持っていた愛読書…もとい人生の教本を腰のポーチにしまいながら答える。

「スバル、いい事を教えてやるメンテナンステのは、性能を保つための保守であつてだな…お前のオンボロローラーが新品に変わるわけじゃない。…壊れるかどうかなんて知らん」

「うう…コウタが冷たい…」

よく言うよ、フルメンテなんて手間のかかるもん頼んできたくせに。

「まあでも、知り合いにデバイスに詳しい奴がいると何かと便利よね。私たちのは支給品じゃないから、定期メンテはともかくフルメンテは大変だしね」

そう言いながらこちらに歩いてくるのは、「ティアナ・ランスター」  
(愛称はティア)俺とスバルとは訓練校の頃からの知り合いで、よ

く組んでいる。…ワガママな凶暴女だ。

「俺に得することが、何一つないんだが？」

「なにいつてるのよ。そのおかげでこんな美少女二人と一緒にいられるのよ？」

何言ってんだ…このオレンジ。

「ならその美少女二人を早く連れてこい。今俺の視界にいるのは、青髪の怪力女と、オレンジ髪の凶暴女だけ——ごふお！？」

俺の鳩尾に、ティアの拳が突き刺さり、膝から崩れる。

「なんか言った？」

こ、こいつ…鳩尾を正確に…てかバリアジャケット着てんだぞ！なんだこのダメージ。

「お、お前…絶対ポジション間違え…「なに？」——ごめんなさい」

まだ開始していないけど、帰りたい…よし帰ろう。でも、了承取らずに帰ると後が怖いから…

「なあ？スバル、ティア一つ相談したいことがあるんだけど…」

「うん？どうしたの？「帰る」以外なら何でも聞くよ」

「なに？「もう帰りたい」以外なら聞いてあげてもいいけど？」

「……」

二人がほぼ同時に答える。何こいつら、エスパー？

凶星を突かれた俺が黙っていると、ティアが肩を震わして…

「まったく！あんたはどうしてそう！いつもいつもやる気がないの  
！！！」

やべえ、説教モードに入りやがった。俺は助けを求めるようにスバルを見るが、スバルは明後日の方向を向く…おいこっち向け幼馴染。  
「だいたい、今回の試験だってスバルが申し込んだからいいようなものを…絶対受ける気なかったでしょ！！」

「……」

ティアの言うとおり、俺のこの試験への申し込みはスバルが代わりにやった。…もちろん事後承諾である。

「……まあでも、たぶんそうじゃなくても一緒に受けたいし、申し込んだろっけど、そんなことは口が裂けても言わない。」

ある程度、ティアが怒鳴り終わった辺りで、スバルが仲裁に入る。  
…遅いよ

「まあまあ、ティア。コウタだって試験が始まれば真面目にやるよ、ね？」

「まあ…な。手抜いて長引くのはかんべんだし、一応は真面目にやるさ」

ティアが俺の不真面目さを叱って、それをスバルが仲裁して…まあいつものパターンだ。

「はあ…まったくスバルといい、コウタといい…どうしてこう手がかかるのかしら…」

「ははは、ご苦労さま。…で、ティア時間は？」

自分の事はとりあえず棚に上げて話題をそらす。

「ちょっとまってね、ええっと…」

答えながら、ティアナが右手を弄る。すると空中に小さなモニターが現れ、現在の時間が表示された。

すると、すぐにカウントダウンが始まり試験開始の時刻になった。

俺達がそれを確認するのとはほぼ同時に、スバルの後方辺りにモニターが現れ、銀髪の少女が映る。同じ髪の色だ、ちょっと親近感。

俺達がそちらを振り向くのを確認してから、少女は腰に手をあてて口を開く。

『おはようございます！…さて、魔導師試験の受験者さん3名。揃

ってますか？』

「「「はい！」「」」

一列に並び、元気良く返事をする。…やっぱ公私はしっかり分けないとね。モニターの少女は、しっかりした返事に満足したように一度頷き、手に持ったバインダーに視線を移す。

『確認しますね。時空管理局陸士386部隊所属の、スバル・ナカジマ二等陸士と』

「はい！」

『ティアナ・ランスター二等陸士』

「はい！」

『コウタ・エルザード二等陸士』

「はい！」

『所有しているの魔導師ランクは、陸戦Cランク。本日受験するのは、陸戦魔導師Bランクへの昇級試験で間違いないですね？』

「はい！」

「間違いません」

「間違いないです」

俺達の答えを聞くと、少女は視線をバインダーから戻し

『はい！本日試験管を務めますのは、私、リインフォース？（ツヴアイ）空曹長です。よろしくですよ』

そう言つて、リインフォース？空曹長は敬礼をする。…どう見ても今の俺より年下なんだけど…曹長！？ほんとどうなってんだ？この世界の労働基準…

「「「よろしくお願いします」「」」

心の葛藤を押し込めて、二人と共にそう言つて敬礼を返す。

いよいよ試験が始まろうとしてた。

——上空——

へりの中から試験会場を見る二人の女性。

「お、さつそくはじまつてるな。リインもちやんと試験管してる。ふふ」

そう言つて、全開のドアに手をかけほほ笑む茶髪の女性は、時空管

理局二等陸佐「八神はやて」

「はやて、ドア全開だと危ないよ。 モニターでも見られるんだから…」

椅子に座り、風になびく髪を押えながら話す金髪の女性は、時空管理局本局執務官「フェイト・T・ハラオウン」

「はい」

その言葉を素直に了承し、ドアを閉じ座るはやて。

「この三人が、はやての見た子たちだね」

モニターを見ながらフェイトが話す。

「うん、三人ともなかなか伸びしろがありそうな、ええ素材や」

「今回の試験の様子を見て、いけそうなら正式に引き抜き？」

「んゝ直接の判断は、なのはちゃんにおまかせしてるけどな？」

「…そっか」

モニターを見て、嬉しそうに目を細めるフェイト。

「部隊に入ったら、なのはちゃんの直接の部下、うゝん一人どっちに入れようか迷ってる子もおるんやけど…なんにせよ教え子になるわけやからな…って、フェイトちゃん？なんか嬉しそうやな？」

「…うん、まあね」

「…?」

嬉しそうなフェイトと、よく分からない様子のはやて。

「（8年ぶりか…また…会えたね）」

——建物内——

モニターの前で何やら作業をしている、茶髪ロングをサイドポニーテールにしている女性。

範囲内に生命反応、危険物反応はありません。コースチェック終了です

「ん、ありがとうレイジングハート。観察用サーチャーと、障害用のオートスフィアも設置完了。私達は全体を見てようか」

イエス、マイマスター

——そして陸戦魔導師Bランク昇級試験が、始まる——

## 第五話「試験??」(後書き)

3000文字以上書いて、まだ開始すらしてないとか…orz

次回は初の戦闘シーン…さてどうなることやら…

## 第六話「試験??」

『三人はここからスタートして、各所に設置されたポイントターゲットを破壊』

モニターに映る銀髪の小…いや少女。この試験の試験官リインフォース？空曹長、見た目は完ぺき幼女だが、階級は俺より3つくらい上…映ってる映像から推測するに、背も小さいんだろうな。

『あ！もろん破壊しちゃ駄目なダミーターゲットもありますからね』

試験官の言葉に応えるように、空中にモニターが表示されターゲットなどの情報が映る。ダミーは青色ね。

『妨害攻撃に気をつけて、すべてのターゲットを破壊。制限時間内にゴールを目指してくださいです。』

…何か質問は？』

内容が理解できているか、最終確認をする試験官。要は「ダミー以外のターゲットを破壊しながら制限時間内にゴールへ向かう」ってことだ。

「あ…え…つと…」

呟きながら俺とティアをチラ見するスバル。

「ありません！」

「ないです！」

ティアと俺は答える。

「ありません！」

俺達の答えを聞いて安心したのか、返事をするスバル。

『では、スタートまであと少し、ゴール地点で会いましょう、ですよ！』

試験官がそう言い、モニターが消えると同時にスタート用の、カウントが表示された。

今は青いランプが3つ。

「確認するわよ！左側と正面のビルのターゲット破壊は、私とスバルで、コウタは迂回して距離が離れているターゲットをお願い！その後、コース沿いに合流！」

ティアが、早口に説明する。なるほど…数が多いところは二人が受け持ち、距離が離れてまばらにあるターゲットは俺が破壊しながら合流か…

「おっけ〜」

「分かった、じゃスタート直後はお前らが正面、俺が右だな」

スバルと俺の返答に頷き、視線をカウントへ戻す。黄色い2つのカウントが消え、赤いカウントが一つ表示される。俺達はそれぞれスタートの構えをとる。

「レディー！」

ティアがタイミングをそろえるために声を出す。…最後のカウントが消える

「「「ゴー！！」」」

3人の声が重なり、俺達は一斉に駆け出した。

俺はスタートしてすぐ、右に曲がり走りながら魔法の準備をする。

「我乞うは、力強き跳躍。我の両足に、大地蹴る力を―― ブーストアップ・ジャンプ」

俺の詠唱に呼応して、魔力で強化された肉体に、更なる跳躍力のブーストがかかる。そのまま柵に向かい、隣のビルの屋上、そして次のビルの屋上へとジャンプしながら移動する。

途中デバイスに表示されている探索魔法の情報を確認しながら、ターゲットのあるビルの前へと辿り着き、銃剣型のデバイスから魔力弾を連射する。

魔力弾は、マシンガン並み…ごめん、言いすぎた。それなりの早さで連射され、窓際に並ぶターゲットを次々破壊していく。

けど、よく見ればかなり外してる。

訓練校に入り、本格的に魔法を学んでいて分かったことだが、俺は魔力の収束・魔力操作に関してはかなりの才能があったようで、更には魔力量も同年代と比べかなり多かった。

とここまでなら、天才と言われてもおかしくなかったが…やはり世の中そううまくはいかない物で、俺には2つの大きな欠点があった。

一つ目は魔力の放出量が同世代と比べ、半分以下しかなかった。

簡単に説明してしまえば、魔力量を水道タンク、放出量を蛇口に例えるなら、俺は人より量の多い水道タンクを持っているが、蛇口が人よりかなり小さいため一度にたくさんの水を出すことができない。

結論から言ってしまうえば、魔力の収束はできてもそれを放出することができないため、収束魔法はおろか砲撃魔法も使うことができない。

射撃魔法は強力な物でなければ使うことができるが、他の人に比べ発動までに倍近い時間が必要になる上、今使っているシュートバレットと言う射撃魔法の基本中の基本の物でさえ、普通に使えば魔力密度の低い、スッカスカの弾が出来上がる…まあ時間かければ通常の物ぐらいにはなるが…戦闘中にそんなに時間がかかるのは致命的。

その為俺は、通常野球ボールくらいの大きさの弾を、得意な魔力の圧縮でビー玉サイズまで縮小し、密度を上げることで強度を、【ソニックムーブ】の術式を応用することで、弾速（速さ＝威力）を、

【ブリッツアクション】の術式を応用することで連射性を上げて使っている。

まあ、言ってしまうえば普通の物より威力は少し低いけど、スピードと連射性は上のショートバレットだ。

2つ目の欠点は、魔力の遠隔操作がまったくと言っていいほどできない。

これは、射撃を中心に戦う魔導師には致命的で、要は弾に誘導性がないため、まっすぐにしか飛ばない。これには当初本当に困り、近接戦闘主体のベルカ式に変えようかと思ったほどだが、残念ながら俺にベルカ式の資質はなかった…

まあ出来ないものは出来ないで、しょうがないため「数打ちや当たる」の理論で連射性を、「避ける前に当てる」の理論で弾速を強化した魔法を使っていくことにした。

以上の事から、先に挙げた「魔力の収束が得意・魔法量が多い」は完璧宝の持ち腐れになっていた。

…って誰に説明してるんだ俺？

頭の中で、謎の第三者に説明してる内に、ターゲットの破壊は完了

した。…ダミー混ざってなくてマジよかった。

探索魔法をかけると、どうもビルの内部にまだ一つあるみたいだが…ここからじゃ狙えない、狙える位置まで移動している時間はない…ここは、直接たたくか。

俺はブーストと一旦解除し、マルチタスクで2つの魔法を準備しながら窓のないビルの内部に飛び込む。

ターゲットの前に設置された2体の妨害用のスフィアが、俺に反応し攻撃の態勢に入る。

「ブリッツアクション　！！」

着地と同時に、準備していた魔法の一つを発動、着地動作から駆け出す体勢までの動きを加速する！そして駆け出す瞬間に…

「ソニックムーブ　！！」

高速移動魔法により、一気に新幹線並みのスピードまで加速する。

動作を加速したまま、目の前に並ぶスフィアを横なぎに刃部分で一閃！速度を緩めず、そのまま正面のターゲットを突き刺す！

——ドガン——！！

俺が停止し、やや遅れて後ろで先ほどのスフィアが爆発する。

「よし…これでこの辺のターゲットは全部か…」

探索魔法で確認、この辺にはもうターゲットはないみたいだ。

しかし、もうかなり使っているがソニックムーブの移動速度にはまだ慣れない。最初の頃はうまく止まれず何度も転んだっけ…でもトッピクラスの使い手は、この倍以上の速度で移動するって言うんだから驚きだ、いくら魔力で強化しても目が付いていくか？

「まあそういうの出来る奴は、ばけも…」

化け物みたいな奴なんだろう、と言いかけて…やめた。

頭によぎったのは、管理局内でこの魔法の1、2の使い手の女性。

…子供だった頃、俺を心配して、いろんな言葉をかけてくれた人…そんな人に対してずいぶん酷いことを一杯いつてしまった昔の俺。謝罪したいと思い、陸士になってから探してはいるんだけど…かなり忙しいようで、未だ会えずにいた。

たとえ誰も聞いてはいなくても、あの人の悪口は言いたくなかった。…会いたいな…

(コウタ!こっちは終わったけどそっちはどう?)

「——!?!?!」

物思いにふけっていると、ティアから念話が入る。やべ、今試験中だった…

(こっちも終わった、追いかけて合流するから先に進んでくれ)

(わかったわ、急いで来なさいよ)

(了解)

とりあえず、考えるのは後だ、早く追いつかないと…

俺は再度ブースト魔法をかけ、先行してるであろう2人を追いかけた。

——上空——

「三人とも、いい動きだね」

「そやな、特にあの男の子面白いな」

ヘリの中でモニターを見ながら、フェイトとはやてが話す。

「最初にブースト魔法を使って、そのあと射撃、次に近接、オー  
ルラウンダーなのかな？珍しいよね」

「うん、まあでもオールラウンダーは他に比べて成長が遅いもんや  
から、そのまま行くのは大変やろうけど…」

「指導次第では、大化けするかもね」

「そやな、けど…難関はまだまだ続くよ、特に最後に控える、受験  
生の半分以上を脱落させてきた関門、大型オートスフィア」

「今の三人のスキルだと、普通なら防御も回避も難しい（一人ソニ  
ックムーブでかわせそうだけど）…中距離自動攻撃型の狙撃スフィ  
ア」

「どうやって切り抜けるか…知恵と勇気の見せ所や！」

「…楽しそうだね、はやて」

「よし、全部クリア！」

デバイスに弾を補充しながら、ティアが話している。

どうやら、結構遅くなったみたいだな。

「あ！コウタ！おそいよ！もう！」

スバルがこちらに気付き声をかけてくる。

「悪い悪い、でこの次は？」

謝罪を入れつつ状況を確認する。

「次は、このまま上。上がったら最初に集中砲火が来るわ！オプテ  
イックハイドを使って、クロスシフトでスフィアを瞬殺！やるわよ  
！」

クロスシフト…訓練校時代から使ってる陣形で、三人にそれぞれ役  
目を割り振り戦闘する。一番慣れている陣形だ。パターンが何種  
類があり、それによって俺のポジションが変わる。

シフトの後ろに付くアルファベットで判断するが…今回は指定なし  
ってことは、俺とスバルが切り込んで敵を固め、三人の同時射撃で  
制圧するパターン（俺のポジションはガードウィング）

「了解！」

俺とスバルはほぼ同時に応える。

壊れた道路に、ローラーの音だけが響く。ティアがスフィアの狙いを集めてくれているので、オプティックハイドによって、姿が見えなくなった俺とスバルは迂回して近づく。（俺のは効果時間が短いのでティアにかけてもらった）

「5!」

ティアのカウントが聞こえ、俺とスバルは固まっていないうスフィアの破壊に散る!

「4!」

スバルが先行し、俺が打ち漏らしを剣部分で叩く!

「3!」

その声が聞こえたとほぼ同時に、オプティックハイドの効果が切れ、こちらを認識したスフィアが攻撃を仕掛けてくる!それを回避しながら射撃の準備に入る!

「カートリッジロード!」

俺はカートリッジを一つロードし魔力の圧縮を始める。

「2!」

俺に迫るレーザーをスバルがリボルバーナックルで弾き、そのまま跳躍する！

「１！」

その声を聞き、俺はその場に停止し！射撃の態勢に入る！（スフィアの攻撃はスバルが引き付けてくれている）

「ゼロ！！」

発射の掛け声と同時にティアが姿を現す！

「クロスファイヤーッ！」

「リボルバーッ！」

「ストライク！」

「「「シュート！！！」」」」

三人の掛け声と共に発射された射撃は、固まっていたスフィアに正確に当たり爆煙を巻き起こす！

煙が晴れると、スフィアは綺麗に一掃されていた。

「イエーイ！ナイスだよ二人とも！一発で決まったね！」

「ま、あれだけ時間があればね」

「…だな」

よかった、命中して…俺あのショットの命中率6割くらいだもんな…

「普段はマルチショットの命中率、あんま高くないのに、ティアはやっぱり本番に強いな〜！」

スバル…それ褒めてねえぞ。

「うつさいわよ〜！」

「いやでも、羨ましいぞティア…俺マルチショットできねえし」

いいなあマルチショット…俺も打ちたいな。

「コウタはティアよりたくさん展開できるけど、発射できないもんね〜」

「うるせえよ〜！」

スバルのセリフが突き刺さる。確かに…展開するだけならティアの倍の数はいける自信がある。でも…展開できるだけで発射できない…くそう

「二人とも遊んでないで、さっさと片付けて、次に…!？」

「うん?…!」

俺もティアにつられて視線を動かすと…

打ち漏らしがあつたのか、スフィアが一つスバルに狙いを定めていた！

「スバルッ！！防御！」

ティアが叫びスバルを突き飛ばし、自身も逆方向に回避する！

「チイツー！！」

俺は慌てて、デバイスを構えスフィアに向けて魔力弾を連射する！

発射の瞬間、グキ！と言う嫌な音が聞こえた…

——上空——

「！？なんや？」

突如モニターの映像が消え、困惑するはやて。

「サーチャーに流れ弾が当たったみたいだけど…」

フェイトはそう呟き、映らなくなったモニターを見る。

―――建物内―――

白い服を着た女性が、映らなくなったモニターを確認し、通信する。

「トラブルかな…？リイン、一応様子見に行くね」

『はいです、お願いします』

セットアップしますか？

「そうだね、念のためお願い。」

―――廃道路？―――

「ティアー！！」

足を押え座りこむティアに、スバルが駆け寄る。 駆け寄る?...口  
ーラーの場合どういうんだ？

「騒がないで！なんでもないから！」

つとそんなこと考えてる場合じゃねえな。

「嘘だ！グキツって聞こえたよ！捻挫したでしょ？」

「だから...なんでもないって——くう、あた！」

立ち上がろうとして痛んだのか、再び膝が崩れる。

「動くなティナ。見せろ」

俺はティアのそばにしゃがみ フィジカルヒール を使う。が...こ  
れは...

「...駄目だな、結構酷くやってる。俺の回復魔法じゃ、時間がかか  
る」

俺の使う回復魔法は正直、あまり効果は高くない、せいぜい小さな  
傷を塞ぐぐらいだ。捻挫は酷ければ結構治療に時間がかかる。

「そんな...ティア...ごめん、油断してた...」

スフィアに気付かなかったのを後悔してるのか、スバルが謝る...気  
付けなかったのは俺とティアも一緒なんだがな。

「私の不注意よ…あんたに謝られるとかえってム力つくわ」

そしてこいつはまた、自分の責任にしている。…まあ昔からか…

「制限時間内に治りそうにはないわね、私が離れた位置からサポートするから、あんた達二人でゴールして」

「ティアー!!」

スバルが声を張る。さて、どうするか…

「うつさい！次の受験の時は私一人で受けるってんのよ!!」

「…次つて…半年後だよ？」

「迷惑な足手まとい達がいなくなれば、私はその方が気楽なのよ！わかったらさっさと行きなさい！」

とりあえず回復魔法は一旦止め、成り行きを見守る。

「ティア、私、前に言ったよね。弱くて、情けなくて、誰かに助けてもらいっぱなしの自分が嫌だったから、管理局の陸士部隊に入っただ…魔導師を目指して、魔法とシューティングアーツを習って、人助けの仕事に就いた…」

「知ってるわよ！聞きたくもないのに何度も聞かされたんだから…」

あゝ俺も聞かされたな、その話と管理局のエース様の話は耳だこだ。

「ティアとコウタとずっとチームだったから！ティアがどんな夢を見てるか、魔導師ランクのアップと昇進にコウタと違って、どれぐらい一所懸命かもよく知ってる！」

…そこで俺を引き合いに出すな。

「だから！こんなところで！私の目の前で、ティアの夢をちよつとでも躓かせるなんて嫌だ！！一人で行くのなんて絶対に嫌だ！！」

「じゃあどうすんのよ！走れないバツク「まあ落ち着け、二人とも」――！？」

このままじゃ時間がなくなりそうなので、割って入る。ティアとスバルの喧嘩に俺が割って入るのもまあよくあるパターンだ。

「ティア、スバルの強情さはよく知ってるだろ？こうなったら何言っても聞きやしねえよ…なんか思いついた手があるんだろ？言ってみるよ」

長い付き合いだしそれぐらいはわかる、こういう時のスバルは意見を押し通すためか、頭が回る。

「裏技！反則取られちゃうかもしれないし…ちゃんと出来るかもわからないけど…上手くいけば三人でゴールできる！！」

「ホント！？」

「あ、あゝ、ええと、その…ちよつと難しいかもなんだけど…、二

人にも無理してもらうつことになるし…」

そこは自信持つて言えよ…

「よく考えると…やっぱ、無茶っぽくはあるし…その…えと…なんていうかその…二人が、もしよければっていうか…」

「ああ〜!!イライラする!」

それは同感だ。

「グチグチいつても!どうせアンタは自分のワガママを通すんですよ!?!どうせ私とコウタはそのワガママに付き合わされるんでしょ!?!だったらはっきり言いなさいよ!」

「ま、同感だな…お前が無茶言つて、俺とティアがフォローする…いつものことだろ? 大丈夫、今まで上手くいったんだし、今回も何とかなるさ」

俺とティアの言葉に決心がついたのか、スバルは顔を上げて…

「三人でやれば、きつとうまくいくよ!力を貸して二人とも!」

その言葉に、俺とティアは微笑み…

「まあ頑張ろうぜ…ティア残り時間は?」

「…4分30秒ね、で、スバル…プランは?」

「はっ——うん!」

「——つて、感じなんだけど…どうかな？」

「なるほどね、強引な力技だけど…現状それぐらいしか手はないわね」

「じゃあまあ、スバルの考えた作戦で行くとして…」

確かに力押しだが、悪くない作戦だ…ただし、こいつたぶん「あの事」考えてないよな？

「よし！じゃあいこ「ちよつとまで！」…う？」

さっそく行動しようとするスバルを止める。

「その作戦の前に、二人に教えてほしいことがあるんだが…重要な事だ正確に教えてくれ」

「う、うん」

「何を教えるのよ？」

「二人の——だ」

——この後、俺には2発の鉄拳が撃ち込まれた——

## 第六話「試験??」(後書き)

なっげえ…試験が…終わらない…細かく書きすぎてるのかな…;

試験編は次で終了の予定です。

感想を書いてくださった、リンドウさんありがとうございました♪  
励みになります。

## 第七話「試験??」

破棄されたビルの並ぶ都市街、廃ビルの一つの屋上に俺とスバルはいた。

スバルは足元に魔法陣を展開し、タイミングを計るように正面のビルを見つめ、俺はその後ろで殴られた顔を撫でていた。

「なんで…殴るし…」

「女の子にあんな質問すれば、あたりまえだよ!」

俺の呟きにスバルがあきれたように返す。…重要な事なのに…

（二人とも準備はいいわね?）

ティアから念話が届く。

（うん!こっちはいつでもいけるよ）

（じゃあ…スタート!）

スバルの考えた作戦はこうだ。まずティアが幻術魔法で大型スフィアの攻撃を引きつけ、俺とスバルが反対側から突入、一気に叩く。

（フェイクシルエット…コレ、めちゃくちゃ魔力食うのよ…。あんまり長くもたないんだから、速攻で決めなさいよ!でないと三人そ

ろって落第なんだから！)

(うん！)

(了解だ)

フェイクシルエツト…自分や他人の幻覚を作りそれを動かす魔法、かなり高度な遠隔操作技術と集中力が必要なため、もちろん俺には使えない。

ティアからの念話を聞き、俺とスバルは突入の準備をする。

「私は、空も飛べないし、ティアみたいに器用じゃない、コウタみたいに色々なことができるわけでもない、…できるのは、全力で走ることと、クロスレンジの一発だけ！」

自身を鼓舞するように、スバルが言葉を紡いでいく、この言葉に呼応するように足元の魔法陣が光を強くする。

「だけど…決めたんだ！あの人みたいに強くなるって！誰かを…何かを…守れる自分になるって！」

言葉を発し、右腕を上に掲げる。

「ウイングロード！」

そう叫び、地面に拳を突き立てる！すると足元の魔法陣から蒼い道が伸びていく。

ウイングロード…先天性の魔法のようで、詳細はよく分からないが

空中に光の道を作る魔法だ、その道は術者でなくとも利用できる。

ウィングロードが正面のビルに突き当たり、壁に亀裂をいれる！

「いくよ！コウタ！」

俺の方を向き声をかける。

俺は魔力により、その場に10cmほど浮遊し、スバルの肩に手を置き応える。

「ああ、いつでもいいぞ…バリアは俺が破壊する。お前は全力で叩きこめ！」

俺の言葉に頷き、スバルはクラウチングスタートの態勢に入る。

（いって！）

ティアからの念話に応えるように…

「いづくぞおおおお！」

一声叫び、最高速でスタートする！そして拳を構え、

「でやああああ！」

声と共に、亀裂の入った壁に拳を叩きつけ、内部に突入する！

内部に突入すると、すぐさまスフィアがこちらに気付き攻撃を仕掛けてくる！

左右に分かれてかわし、俺は攻撃の態勢に入る！

「カートリッジ、ロード！」

カートリッジを一つロードし、圧縮した三角柱の魔力弾を作り出す！そしてそれをドリルの要領で高速回転させる！

—— キュイイーン！

空気を裂くような音が鳴る…

「スパイラル…」

狙いを付け…

「バレット！！！」

高速で発射された弾は、スフィアのバリアにぶつかり一瞬火花をひらせ、バリアを破壊し、スフィアとその後ろの壁を貫通し穴をあける！……『豆粒』サイズの……

スフィアは…なぜか攻撃をやめ…こちらを少し見つめた後、「なにこいつ？」みたいな感じでふいっと『スバルの方』を向き、攻撃を開始する…

俺は、予想外の精神攻撃に崩れ落ちる……機械にまで馬鹿にされた……

「一撃!! 必倒!!」

スバルはそう叫び、収束した魔力に自身の魔力をこめた拳を叩きこむ!

「デイベイン! バスタアアア!」

放たれた蒼い閃光はスフィアと更には後ろの壁まで破壊し……巨大な穴をあける!

……いいな、収束魔法……俺も使いてえよ……

俺はまだ精神的ダメージから立ち直れない。

「やった、やったよ! コウタ!」

スバルが嬉しそうにこちらに話しかける……

「あ、ああ……や、やったな……」

「こ、コウタ?……大丈夫」

「だだ、大丈夫だ、さあ残りの時間も少ないし……急ごう……」

高火力魔法覚えよう……絶対、覚えよう……

俺達はティアと合流し、ゴールを目指す。

動けないティアをスバルがおんぶし、俺はスバルの肩につかまり移動する。

「あと何秒？」

「16秒！まだ間に合う！」

スバルの問いに応えつつ、ティアは最後のターゲットを撃つ！スバルはターゲットが破壊されたのを確認して、

「魔力！全開いいいい！！」

急加速する。俺は二つの魔法の準備をしているので黙ってる。

「ちよっ！スバル！止まる時のこと考えてるんでしょっね？」

ティアが慌てて聞く…考えてるわけないだろ、スバルだぞ…

「え？…あつ…」

スバルはすっかり忘れてた、みたいな感じで応える。

「嘘お！」

ティアの顔が絶望に染まるが…

「大丈夫だ！それは俺が考えてる！！」

そう応え俺は、ゴール地点の先に魔法陣を5つ展開する、大きい物が中心に一つ、四方に小さい魔法陣が四つだ。ああ、ちなみに遠距離操作は苦手だが、遠距離発動は出来る、ってか得意分野だ。

俺は頭の中で、さっき聞いた二人の体重（情報料は顔面パンチ×2）、移動のスピードなどを暗算して、魔法の威力を調整する。

「あ、なんか…ちょいやバです」

そう言つて試験官は進路から横に逸れる。

スバルがゴールを通過するのと同時に…

「アクティブガード　！！」

俺は用意していた一つ目の魔法を発動する。

アクティブガード…緩い爆風で対象の速度を減速させる魔法。運転講習などでも使われている魔法で、爆風の威力は術者が計算して発動する。

目の前に、緩い緑色の爆風が現れ…スピードが落ちる…が！止まらない…あれ？…計算的には少し強めで、やったはずんだけど、こいつら…サバ読みやがったな…

「ホールディングネット　！！」

しかたないので用意してたもう一つの魔法を、発動する。

ホールディングネット…網上の魔力が対象を受け止める。転落防止用によくつかわれる魔法だ。

瞬間、4つの魔法陣から緑色の網が出て、スバルの足に引つ掛かり、そのまま倒れた俺達を受け止める。

…二人を庇うように、体を割り込ませたせいで、俺は今二人の下敷きになっている。この重さ的に…。○k g…俺の計算より4k gほど上だ。

「いてて…大丈夫？二人とも」

「ええ、私は大丈夫よ」

「てか、重い！…早く降りろお前ら！」

スバル、ティア、俺の順に話す…まあ二人とも無事なようで、よかった。

「重いつて！女の子にそんなこといっちゃだめなんだよ！！」

「女の子だろうが！なんだろうが！二人乗ってれば重いに決まってるだろうが！！」

スバルが、俺の言葉に噛みついてくる…いあ、先にどけよ。

そんなコントをしていると…

「も～～！！三人とも危険行為です！！」

怒鳴りながら、試験官がおりて…ちっさ！？

「頑張るのはいいいですが！怪我をしては元も子もないですよ！…そんなんじゃ、魔導師としてはダメダメです！！」

と、至極もつともな事を言ってるが…だめだ見た目が気になってそれどころではない。

「…ちっさ…」

同じことを考えてたのか、ティアが呟く。そこは思っても口に出すなよ…一応上官だぞ。

「まったくもう！」

試験官様は大変の怒りのようで、この後も言葉が続くかと思われたが…

「ははは、まあまあ」

と上から声が聞こえる…てかお前らしい加減にどけよ！見えないだろ！

「ちょっとびつくりしたけど、無事でよかった…とりあえず試験は終了ね。お疲れ様」

そう声が聞こえると、俺達の体が浮き、ホールディングネットから降ろされる。

そこに居たのは、局員でなくとも殆どの人間が知ってるであろう、「エースオブエース」こと高町なのは一等空尉である。たしか…あの人の親友だったよな…

「あ…」

スバルは、微動だにしない。憧れの人だって言ってたから緊張してるんだろつか？ ティアも俺と同じようにスバルを見る。

「リインもお疲れ様。ちゃんと試験官出来てたよ」

「わーい！ありがとうございます。なのはさん！」

さっきまでの怒りはどこへ行ったのか、とたん笑顔になる小人試験官。

「まあ、細かいことは後回しにして…ランスター二等陸士？」

「あ、はい！」

「怪我は足だね。治療するからブル脱いで」

「あ！治療なら私がやるですよ」

高町一等空尉の言葉に反応し、試験官がこちらに近づいてくる。

「あ、えと…」

ティアは何かを考えるようにこちらを見ている。

「やってもらえよ、俺の治癒魔法じゃ時間かかりすぎるしな」

「うん…えと、お願いします」

俺達の言葉を受けて、試験官は治療を開始する。すげえ…俺のと全然違う。

ふとに気なり、目を切り替え、視線を高町一等空尉に戻す。…すげえよ…なにあの魔力。

俺の目には、とんでもない密度で高町一等空尉の周りに停滞する、桃色の魔力が写っていた。これが、オーバースか…Aまでと次元が違う。

「なのは…さん」

俺が、自分にしか分からないことで驚愕していると、スバルが高町一等空尉に声をかける。

「うん？」

優しい表情で、高町一等空尉が応えると、ビクつとしたように。

「ああ！いえ、あの…高町、教導官！！一等空尉！！」

慌てて呼称を改める…が、

「なのはさんでいいよ。みんなそう呼ぶから」

そう高町一等…なのはさんはスバルに近づきながら応える。

「4年ぶりかな？背、伸びたね…スバル」

「——！？えと、あの…あの…」

「うん、また会えて嬉しいよ」

感極まったのか、泣きだしそうになるスバルに、優しく微笑み手を置くなのはさん…よかったなスバル。

なのはさんに抱かれ泣きだしたスバルを、ティアと一緒に見つめていた。

「私の事…覚えててくれたんだ…」

泣き続けるスバルに声をかけるなのはさん。

「あの…覚えてるって言うか…私、ずっと、なのはさんに憧れてて…」

「嬉しいな…」

「あ…」

優しく応えるなのはさん、空気になりつつある俺とティア…

そのまま二人の会話を眺めていると…リイン試験官が話しかけてきた。

「ランスター二等陸士とエルザード二等陸士は、なのはさんの事ご存知ですか？」

「あ、はい知ってます」

「俺もティアも、スバルに耳にタコが出来るぐらい聞かされましたので…」

てか、たぶん知らない人なんてほぼ居ないだろ、あの人雑誌とかにもよく出てるし。

「そうですか」

俺達が、リイン試験官と話していると上空からヘリが下りてきて…その窓から覗いてる女性を見て、俺は固まった…

——そう、これが…8年ぶりの再会だった——

## 第七話「試験??」(後書き)

試験やつと終わった~~~~Orz

長かった…もう少しコンパクトにまとめる能力を付けねば…

後主人公…残念だがお前が高火力魔法を覚えるのは、私の中では地球編あたりの予定だ!!

さて今回は、オリ主とフェイトの再会、そして勧誘の話です。

撃震さん、感想ありがとうございます。

主人公は今の予定だと…最終的にスバルと同じぐらい(陸戦AA)になる予定です。

最後の最後、それ以降戦闘シーンがないであろう最終戦では無双してもらっ予定です、それまでは器用貧乏な感じで行きたいと思ってます。

現在の構想では、主人公は最終戦の手前ぐらいで精神的に成長する予定です。

…このペースじゃそこまで何話かかるのかORZ

後半に進むにつれ、原作と違う展開が増えていく予定です。

ではまた~

## 第八話「再会と勧誘？」

——とあるオフィス——

「——と、まあそんな経緯があつて…八神二佐は新部隊設立のために奔走」

金髪の女性フェイトさんが話す。

「四年ほどかかつて、やっとそのスタートを切れた、というわけや」  
それに続けるように、八神二佐が話す。

試験が終わつた俺達は、八神二佐に呼ばれ試験結果を待つまでの間  
オフィスで話を聞いていた。

「部隊名は、『時空管理局本局遺失物管理部機動六課』！！」

元氣よく話すのは、ライン試験官。

「登録は陸士部隊、フォワード陣は陸戦魔導師が主体で、特定遺失物の捜査と、保守管理が主な任務や」

「遺失物…」

「？」

八神二佐の言葉に考えるティアと…頭に？マークが見えそうなスバル…

「ロストロギアですね？」

「????」

ロストロギア…古代遺産技術の総称だったわけ？…オーバーツつてやつかな？

…表面上はそう思いつつも、俺は現在まったく冷静ではなかった。

目の前に、ずっと謝りたかった人がいる…なのに言葉が出ず。頭の中は思考が渦巻いていた。

…あの頃と比べ、俺はだいぶ見た目も変わっている。ボサボサで伸びきっていた髪は、きれいに整えセミロングぐらいにしているし、身長もだいぶ伸びた、顔つきだって変っているだろう。

覚えてるわけないよな？いや、覚えてたってわからないくらい変わってる。だったら下手に思い出させない方がいいんじゃないだろうか…いやでも、あの時の態度を謝罪しないと！…でも、しかし…

そんな考えが頭の中でぐるぐる回り、思考がまったく定まらない。正直話も半分ぐらい耳に入っていないし、出されたコーヒーにも手を付けずにいる。

(ティア！コウタ！)

(…なによ!)

(……)

突然スバルからの念話、黙ってると言いたげに応えるティアと無言の俺。

(ロストログアってなんだっけ?)

…お前訓練校主席じゃねえのかよ。

(うつさい!話し中よ!後にして!)

(……)

「で、…スバル・ナカジマ二等陸士、それと、ティアナ・ランスタ―二等陸士、そして、コウタ・エルザード二等陸士」

「「はい!」」

「……」

「私は三人を機動六課のフォワードとして、迎えたいと考えてる…  
厳しい仕事になるやろうけど、濃い経験は積めると思うし、昇進機会も多くなる…どないやろ?」

「あ、え」と…」

「スバルとコウタは高町指導官に魔法戦を直接教われるし、執務官

志望のティアナには、私でなければアドバイスとか出来ると思うんだ」

「あ、いえ…とんでもない。と、いいですか…恐縮です…といいま  
すか…」

「……」

迷うスバル、それを見て声をかけるフェイトさん、さすがに焦るティア、あいつも変わらず無言な俺。

「ん？…コウタ？どないかしたん？」

「…！？い、いえ…もも、勿体ないお話に驚いていただけです…！」

ずっと無言の俺を心配してか、八神二佐が声をかけてくる。ドモリ  
つつ返す俺…ああ！どうすればいいんだ！

「え〜と、取り込み中かな？」

「ふふふ、平気やよ〜」

そう言いながら、バインダーを持ってオフィスに入ってきたのは  
さん。それに大丈夫だと応える八神二佐。…試験結果かな？

一旦考えるのをやめ、なのはさんに向き直る俺。

「三人とも、技術はほぼ問題なし…」

技術…『は』？

「でも、危険行為や報告不良は、見過ごせるレベルを超えています。」

ですよう、ビル壊したりしたもんね、倒壊の危険だってあるよね。

「自分や仲間の安全だとか、試験のルールも守れない魔導師が人を守るなんて、できないよね？」

「う…」

「…はい」

「…その通りです」

なのはさんの指摘に、反論できない俺達。

「だから…残念ながら三人とも不合格…」

まあ、しょうがないか…次は半年後だな。

「…なんだけど！」

「…「え？」」「」

「三人の魔力値や能力を考えると、次の試験まで半年間もCランク扱いにしておくのは、かえって危ないかも？というのが私と試験官の共通見解」

「ですう」

なんか…変な展開になってきたぞ、再試験とかじゃないだろうな？

「ということで…これ」

3枚の用紙と、同数の封筒を出すのはさん。

「特別講習に参加するための申し込み用紙と、推薦状ね。これを持って本局の武装隊で三日間の特別講習を受ければ、四日目に再試験を受けられるから…」

「え…ええ？」

「あ…」

…やっぱりか、しかしまあ二人はBランクになりたかったみたいだし、よかったかな？

「来週から、本局の厳しい先輩達にもしっかりもまれて、安全とルールをよく学んでこよ？そしたらBランクなんて、きっと楽勝だよ。…ね？」

「…ありがとうございます…！」

三人そろって頭を下げる。

「合格までは、試験に集中したいやろ？私への返事は試験が済んでからってことにしようか」

「すみません！恐れ入ります」

八神二佐の言葉に三人そろって立ち上がり、敬礼をする。

退出しようとする、フェイトさんが…

「あ…ちょっと待ってもらっていいかな？コウタ」

呼び止められる俺、心臓が跳ねた気がした。

フェイトさんは微笑み…『あの頃』とまったく同じ表情、同じ声で問いかける

「寂しそうな顔してるよ？私でよければ相談に乗るよ？」

その言葉にハッとする。

……そつか…覚えててくれたんだ…なら…

俺は、『あの頃』と同じ言葉を、今度は『あの頃』と違い冗談だと感情をこめて返す。

「あなたが、帰ってくれば…元気になりますよ？」

「…っちょ！コウタ！！」

俺の返答に、仰天するのはさん、ライン試験官、八神二佐、そして慌てた様子で俺を諫めようとするスバルとティア。

でも、フェイトさんは笑いながら…

「ふふふ、…また…会えたね…今度は名前…教えてくれるかな？」

さつき呼んでたとかは、言わない…これは『あの頃』の約束だから…俺は微笑みながら。

「コウタ・エルザードです。…お久しぶりですフェイトさん」

俺の言葉に驚き、言葉を失っている5人。

「ホント久しぶりだね…あ！そうだこれ！」

そう言つて、ポケットから500と書かれたミッドチルダの硬貨を取り出し、俺に手渡す。

「遅くなつてごめんね、会ったらすぐ払えるように、ずっとポケットに入れてたんだよ」

「…たしかに、受け取りました。…その、フェイトさん…」

「うん？」

緊張で、口が震えるが…言わないと…

「あ、あの頃は…色々失礼な事を言って…申し訳ありませんでした  
！！」

はんば叫ぶように謝罪し、頭を下げる。

「いいんだよ…気にしないで、…表情、軟らかくなったね…また会  
えてうれしいよ」

「…やばい、涙出そうだ。さっきのスバルの気持ちがあった気がし  
た。」

「なんや？…二人とも知り合いなん？」

固まっただ状態から戻った八神二佐が、フェイトさんに問いかける。

「うん…二人には話したことあるよね？公園で機械やデバイスの修  
理をしている子供がいるって」

「あゝあつたな…ってちょい待ち！あれ聞いたの１１歳ぐらいの  
ころやで…」

記憶力いいな…さすが指揮官。

「はい、当時は7歳でした。フェイトさんはその頃よくいらつしたってました」

俺の言葉に、スバルとフェイトさん以外は再び固まる…まあそりゃあそうか…

「ん？…じゃあコウタってデバイスマスターなの？」

なのはさんがそう聞いてくる。

「いえ、インテリジェンスのAI構築を勉強してなかったので、資格は取れてません」

そう、俺はストレージなどは1から組むこともできるが、AI部分はまだ勉強中で制作できない。

その返答に納得したのか、なのはさんは無言でうなずいた。

「あ、引きとめてごめんね」

フェイトさんが思い出したように話してくる。

「いえ…お会いできて嬉しかったです」

「うん、もし同じ部隊になったらよろしくね」

「はい！」

嬉しそうに言うフェイトさんに応え、俺達はオフィスを後にする。

「あゝなんか色々緊張した。てかビックリしたよ！コウタがフェイト執務官と知り合いだなんて…」

「そうね、そんな話初めて聞いたわよ！いつ知り合ったの？」

芝生に三人で座り、話していると…やっぱり話題はそれに行くか…

「スバルと知り合う前だよ。一人で生活してた俺を色々心配してくれたんだ…その頃の俺はロクに取り合わなかったけど…な」

「ふゝん…珍しいね？コウタが自分の昔話するなんて」

「そうね、訓練校以来かしら？」

「まあ…たまには…な」

「でさ、新部隊の話、二人はどうするの？」

話題を変えるようにスバルが言う。

「アンタはいきたいんでしょ？なのはさんはあんたの憧れだし、同じ部隊なんて凄いラッキーじゃない」

「まあ…そうなんだけどさ…」

「ティアはどうするんだ？」

「私は…どうしようかな？遺失物管理部の機動課っていったら…普通はエキスパートとか特殊能力持ちが勢揃いの生え抜き部隊でしょ？そんなところ行ってさ…今の私がちゃんと働けるかどうか…」

「ふふふん」

「…なるほどな」

俺とスバルは二人してにやにや笑う…背中押してほしいんだなこいつ。

「なによ…二人して気持ち悪い」

「うふふふ、だってね？」

「じゃあスバル、その役目はお前に任せたぞ」

「役目？二人とも何言って…」

「そんなことないよ！ティアなら出来る！…って言ってほしかったんでしょ？」

…おい一言多いぞ、てかその顔は馬鹿にしてるようにしか見えない。  
ああ、ほらティア怒ってる。

「いたたたたた！」

「なによそれは！言ってほしくないわよ！馬鹿言ってるじゃないわよ！」

言わんこっちゃない…ティアにつねられながら、助けを求めるようにこつちを見るスバル、ポーチから人生の教本を取り出して読み始める俺。

「終わったら、声かけてくれ」

「ちょ！…いたたた、助けてよおおお」

無理…だって止めたら、たぶん俺がターゲットにされるもん。

「うう…痛いよお」

終わったようなので、うつぶせに倒せるスバルを尻目に、俺はティアに近寄り声をかける。

「ティア…まあそんな難しく考えるなよ」

「コウタ？」

「前線で指揮できる統率力がお前にはあるんだし、大丈夫…十分や  
つてけるさ」

できるだけ優しく声をかける。

「…そうね…ありがとう」

「あれ？…なにこの扱いの差…酷いよティア…」

お前は言い方が悪い…

「ともかく！やろうよ！二人とも！」

スバルが急に起き上がり、キラキラした目で叫ぶ。

「私はなのはさんに色んなことを教わって、もっともっと強くなりたい！ティアは新しい舞台で経験積んで、自分の夢を最短距離で追いかける！…で…あれ？そういえばコウタはどうするの？」

「…めんどくさい」

「ええ〜コウタも一緒に行こうよ！だって当面三人でやっと一人前扱いなんだから、まとめて引き取ってくれる方が嬉しいじゃん！！」

…それお前が言うのか？

「スバルの物言いには納得いかない…てかすごいムカつくけど、実際ににはっぱかけといてめんどくさいってなによ!」

「いや…だってな…厳しい訓練とか、忙しい任務とか、気が滅入るじゃん?それに、俺昇進とか興味ないし…」

「ええー一緒に行くつよコウタ!」

「いやだから俺は…」

「…一緒に…いこうよ…ね?」

ぐ、こいつまた…

「いや…あのな…」

「…一緒に…」

「…わかった、俺も新部隊に入る」

「やった〜」

「…アンタ、相変わらずスバルに弱いわね」

「…言うな…自覚してる…」

でもまあ、どの道二人が入るなら…入ってただろうが、二人と一緒にがいいしな。

…自分の性格がほんと嫌になる。本心を素直に言えなくて、引きとめてほしい、引っ張っていつてほしいなんて期待してる自分が…本当に嫌いだ。

まあまずは再試験だな、頑張ろう…

目の前でじゃれる二人を見ながら…一人そんなことを考えていた。

——廊下・窓際——

芝生で話す三人を見つめる、二人の女性。

「あの三人は、まあ入隊確定かな？」

「だね」

「なのはちゃん嬉しそうやね？」

「三人とも育て甲斐がありそうだし、一人どいう方向性で育てるか悩む子もいるしね」

「ふふふ、それは先が楽しみやな」

「新規のフォワード候補は、あと二人だけ？…そっちは？」

「二人とも別世界。今シグナムが迎えに行つとるよ」

二人が話しているともう二人、歩いてくる…一人は浮いているが

「なのは！はやて！待たせ」

「おまたせです」

「ほんなら次に会うんは、六課の隊舎やね」

「お二人の部屋、しつかり！造つてあるですよ」！

「うん！」

「楽しみにしてる…あ、はやて？」

「うん？どうかしたん？フェイトちゃん」

「一人…コウタの入れる隊、決まっていって言ってたけど…うちにもらっちゃダメかな？」

「ライトニングにか…うんそやね！そっちにはセンターガードがおらへんし、前衛もガードウィングやから…ええかもな、なのはちやんはどう？」

フェイトの言葉にハヤテは少し考えて応え、なのはに話を振る。

「うん！私もいいと思うよ。確かに前線指揮ができる子が、両方にいた方がいいし」

「よっしゃ！じゃあコウタはライトニング分隊に入れる方向で進めとくわ、本人には今度会った時に話すことにするな」

「うん、ありがとう二人とも」

## 第八話「再会と勧誘？」（後書き）

勧誘…そして再会、主人公の所属が決定しました。

次回は大きな原作改変があります。

## 第九話「休暇と食事？」

—— 地上警部部隊・隊舎 ——

カタカタとキーボードを叩く音が、静かな室内に響く。

特別講習を受け、再試験に合格し、八神二佐にスカウトの返事をし  
て、今日は休暇。

現在俺は、自分のデバイス用のAIプログラムを作っていた。主に、  
魔力圧縮と誘導補助に主軸を置いたものを作る予定だが…あまりは  
かどってはいなかった。

俺がAI製作に不慣れな事もあるんだが、問題は魔力の圧縮である。  
誘導補助の方は、参考になるプログラムも多いんだが、魔力圧縮に  
ついては使い手が少なく、十分な資料が集まっていない。

…この分だとまだ数カ月はかかるな。

きりのいいところまで進め、一息付こうとすると、端末にメールが  
入る。あ、そうか端末と連動出来るようにもしないと…

『今晚、一緒に食事でもどうだ？』

「あの人」らしい、なんとも簡潔なメールに少し苦笑しながら返信  
を打つ。

『かまいませんよ、19時ぐらいでどうでしょうか？場所はいつも  
の場所でもいいですか？』

打ち終わり送信すると、ものの数秒で返信が来る。はええよ

『ああ、それで大丈夫だ』

ホントメール短いなこの人。 さて、朝食の支度でもするか…

手際良く刻まれる野菜、寸分違わぬ動きで動かされるフライパン。

自分で言うのもなんだが、俺は料理がうまい。作るスピードだけなら三ツ星ホテルの料理長にも負けない自信がある。そしてなにより安くうまく、大量に作るのが得意だ！

子供の時から度々うちに来ては、冷蔵庫の中身をすべて食らい尽くしていく幼馴染に、破産させられないために自然と身につけた技術だった。今では唯一の趣味と言ってもいい。

食事はすぐ出来上がり、それを食べながら約束の時間まで何をするか考えていた。

端末と連動させる部分のAI参考資料がほしいな…本屋に買いに行

こうか。あ！そういえば今日『ワガママ女性の対処法』入学初日編』の発売日だ。それも買わないと…

食べ終わった食器を片づけていると、誰か来たようだ。手を拭きドアに向かう。

「コウタ、おっはよー」

そこには、私服のスバルとティアがいた。

——ボタン！

勢いよくドアを閉じカギとチェーンをかける。今日は家の中で過ごす…そうしよう。

「ええええ！なんで閉じるの！コウタ！おーーーーーい」

ドアの前で、スバルが何か言いながらドアを叩いてるが、聞こえなかった事にする。

——ドンドンドンベコ！ドンドン！

扉を叩き続けるスバル…え？ベコ？

…嫌な予感がして振り返ると、スバルが叩いているであろう所はそれに合わせるようにへこんでいた。そういえばこいつ、素手で戦闘機械とか破壊する奴だった…慌ててドアを開ける。

「扉壊す気かお前！」

「あ、コウタ！おっはよ〜」

「…ああ、おはよう。それで？二人して何の用だ？」

「スバルが昇級試験の合格祝いに、三人で遊びに行こうって」

「そそ、だからコウタも一緒に行こう！！」

「…ちなみに遊ぶって、どういうルートで行くつもりだ？」

「まずは買い物をして〜ご飯食べて〜あとは適当…かな？」

「要は俺に荷物持ちになれと…そう言いたいのか？」

「そうよ？」

「そうだよ〜」

悪びれる様子もなく、二人は即答する。

「なんでせつかくの休暇に、罰ゲームみたいなことしないといけないんだよ…」

「なにいつてるよ、こんな美少女二人と過ごす休日なんて、ご褒美

みたいなもんじゃない？荷物持ちぐらい当然の対価でしょ」

何言ってるんだこのオレンジ…

「…一応聞くんだけど、俺に拒否権って——」「ない（よ）！——」「——ソウデスカ」

はあ…まあ俺も買いたいものがあつたし、時間つぶしにはいい…のか？

「わかったよ。じゃあ準備するからちょっと待っててくれ」

「わかった」

「手早くね」

やれやれ…

「なあ…まだ買うのか？」

俺の両手には今、大小20の紙袋が下げられていた。

「あ！ねえねえティア、次はあのお店に行こうよ！」

「あの店？うーん、私としてはその隣の店がに気なるんだけど…」

聞いちゃいないよこいつら…だいたいこんなに服ばっか買って…全部着る気か？

俺はため息をつきながら、前を歩く二人についていく…現在11：30、まだまだ先は長そうだ。

「二人とも！そろそろお昼にしない？」

15件ほど店をめぐり終わったところで、スバルが提案してきた…  
13：20…まあお昼時だな。

「いいわよ。どこにする？」

「安いところがいんじゃないのか？どうせそのブラックホール胃袋がアホ程食うんだし…」

「…そうね、ファミレスにしましょうか」

この辺他は高い店しかないしなあ…

「スバル、金は貸さないから支払える程度にしるよ」

「うう…わかってるよお」

「いゝや！ちゃんとっておかないとお前は何度でもやるからな！この前だって——」

「ああ！その話はやめて！すとつぷ！…！」

「…その二人、コントしてないでさっさと行くわよ…」

——ファミレス——

「…注文はお決まりでしょうか？」

清楚な感じのウェイトレスが注文を取りに来る。

「ドリンク系以外全部!!」

「は?...え?」

スバルの元気のいい答えに、時の止まるウェイトレス。

「ああ、気にしないでください。こいつ大食いなんで、後、その注文より先に俺のランチのBと...ティアは?」

「うーん、じゃあ、私はカルボナーラ」

「その二つの注文を先に持ってきてください、後、ドリンクバー3つで」

「...は!?!はい、かしこまりました」

俺の言葉に我に返り、頭を下げ戻っていくウェイトレス。

「だいたいみんな同じ反応だよな、まあ無理ないけど...」

「誰でも固まるわよ、いきなりメニュー全部なんて言われたら」

「あはは...そういうば、二人ともご飯終わったらどうする?」

「どうしようかしら?あらかた店も回ったしね...」

「それなら、俺が買いたいもんがあるんだが、どっか大きめの書店に行ってもいいか?」

「本買うの？…またあの失礼な本じゃないよね？」

…その本である。まあ言ったら殴られるので言わない。

「いや、デバイスのAIの本だよ。外部機器との連動について書いてある本がほしくてな」

「AIの本？」

俺の答えにティアが聞き返す。

「ああ、今のデバイスをインテリジェンスに改良したいんだが、なかなか難航しててな…」

「AI自分で作ってるの！？すごー」

「簡単な奴だけだよ、俺の魔法はちょっと特殊だし、既存のじゃ相性悪くてな」

「アンタ…進む道間違えてるんじゃない？」

…俺もわりとそう思う。

ファミレスに入って40分、俺とティアは昼食を終え、ファミリース席のテーブルを埋め尽くす料理を食べ続けてるスバル眺める。

「このペースだと、後1時間はかかるわね。コウタ、なんかある？」

「トランプなら有るが？」

「それでいいわ、適当になんかやってましょ」

「あいよ」

俺は腰のポーチからトランプを取り出し適当にシャッフルする。

「なんか賭けるか？」

「うーん…じゃあ負けた方が、この後エイティワンのアイスクリームおごりで」

エイティワン…あちこちに支店のある有名なアイスチェーン店だ…え？聞いたことある？気のせいだろ。

「おっけーじゃポーカーでいいか？10勝した方が勝ちな、降りは2回で一勝分ってことで」

話ながらカードを配る。ちなみに、こんな感じの賭けは何度かやっている。

俺とティアの勝率は五分五分、ティアとスバルの勝率は9：1、俺とスバルは4：6くらいかな？（5割はわざと負けてるが）

俺の手は…テンハイのツーパー…まあ初戦だし様子見かな。

「ごちそうさまでしたー！」

スバルが元気よく手を合わせる。その様子を眺める俺とティア…ちなみにポーカールの結果は8・10で俺の負け。…くそう

「スバル〜コウタが、エイティーワンのアイス奢ってくれるらしいわよ」

「ホント！？やった〜♪」

「いや待て、確かにティアには負けたし奢る。でもスバルには…」

てかお前、今アホ程食ったばかりか！まだ食う気か！？

「ありがと〜コウタ！！私あそこのアイス大好きなんだ♪」

「いや…その…」

「〜♪」

「………」

本気で嬉しそうにしてるスバルを見て、何も言えなくなる…ティア後で覚えてるよ。

結局その後、ティアには2段、スバルは…7段のアイス奢り、本屋に行ったり、今度は、小物の買い物に付き合わされたりしながら時間は過ぎ、俺は二人を隊舎まで送った後、約束している店へ急いだ。

「いつ見ても…すげえ店…」

俺の目の前には、見るからに高級店と言わんばかりの巨大な料亭があった。

入口で名前を告げ、部屋に案内してもらうと、そこには…

「おお！来たか、まってたぞコウター！」

渋い髭の生えた。見るからに豪気そうな中年の男性がいた。

「お久しぶりです。レジアスさん」

レジアス・ゲイズ中将…地上本部で多大な影響力を持つ人物、訓練校時代に馬鹿をやった俺を庇ってくれ、その後も色々世話を焼いて

くれている。賛否両論ある人だが、俺にとってはただの気のいいおっさんだ。

「あらあら、私の事は？」

レジアスさんの隣に座る、知的な感じの女性が話しかけてくる。

「忘れてないですよ、オーリスさんもお久しぶりです」

オーリス・ゲイズ三佐…レジアスさんの娘で副官、色々俺を心配してくれる優しい人だ。

「ほんと…久しぶりね。そう言えばBランク試験受かったんですっけ？おめでとう」

「ありがとうございます」

「まあ、挨拶はその辺で座れ座れ」

「はい」

促されるまま席に座り、話を始める。内容は主にここ最近の事、六課勧誘の件などだ。

「まったく！八神の目の付け所にも困ったもんだ！コウタはいずれワシの部隊に入れようと思っておったのに…」

「断固として断ります！」

けど…あれ？

「あんまり嫌な顔しませんね？…八神二佐のこと嫌ってるって聞いてたんですが…」

局内では、割と有名な話だ。

「正直言ってな…別にそうでもない、あの娘が考えあつて部隊を作ったのは知っておるしな…ただ、やはり本部内には教会の予言や、あの娘に反感を持っているものも多い。…残念な事ではあるが、ワシが表立っていい顔をするわけにもいかんよ」

そう言っつて少し辛そうな顔をするレジアスさん。

「中間管理職つてのも…大変ですねえ」

「はははまったくだ！中将と言っつても、結局自由にできることなどたかが知れておるし、部下達の手前自由に動くことも出来ん、まったく窮屈な事だ」

「なにをいつてるのかしら、今回の食事の件だつて、かなり強引にスケジュールを調整したくせに…」

オーリスさんが呆れたように話す。…相当力技で抜けてきたんだろ  
うなあ…

「あはは、なんかすみません」

「構わんさ、ワシはこうしてお前を話すのが楽しいからな！」

はははっと豪快に笑うレジアスさん…こうしてるとホントただのオジサンにしか見えない。

「本当にお父さんは、コウタの事がお気に入りね…」

「でも、色々していただいて、実際かなり助かってますよ…」

訓練学校から正式に局入りする際、親の居ない俺の身分保障をしてくれたのもレジアスさんだ…本当に俺、頭の上がない人多いなあ…

「そう言えば、なんか強力な兵器の開発をしているとか？」

「ああ…『アインヘリアル』の事が、まあ鉄屑だ…」

「鉄屑って…」

アインヘリアル…地上本部が開発している、固定式の巨大魔力砲だ。

「あんなものは実際地上から攻められれば、防衛戦にならざるおえんしな、そんな物に予算を回すよりは、隊員の育成に力を入れた方が、よっぽど効率的なのに、上の連中はわかつとらんよ！」

「あれだけの威力の魔力砲台…抑止力にしても行き過ぎた力だわ」

世間的には、レジアスさん達が中心となっているアインヘリアルだが、実際のところ本人達是否定的だ。

「じゃあ、なんで地上本部はそんな物を？」

「安心感がほしいんだろうな、これさえあれば大丈夫！絶対に安全！そんな言葉に人は弱いものだからな…人を守るのは兵器などではなく…人であるべきなんだがな」

忌々しげに話すレジアスさん。上と下と板挟みになって色々大変なんだろうな…

その後は、たわいのない話を続け夕食会はお開きとなった。

料亭から出る時、レジアスさんは思い出したように…

「コウタ、スバルちゃんとティアナちゃんは…元気にしているか？」

と聞いてきた。レジアスさんは、スバルとは直接の面識はないが、ティアナとは一度会っている。

「ええ、元気すぎて困るぐらいです。今日も買い物に付き合わされてクタクタですよ」

俺の言葉に、微笑みながらも、辛そうな顔をするレジアスさん。

「そうか…ティアナちゃんにはワシの監督が行きとどいてなかった  
せいで…スバルちゃんにはワシの犯した罪のせいで…辛い思いをさ  
せてしまっているから…な」

「……」

「コウタ…あの二人を支えてやってくれ…頼んだぞ」

俺が返事に困っていると…真剣な顔になり俺に話しかけてくる。

「…はい！」

俺はそれに心からの言葉で返す。

「ただし、コウタも無理をしないようにね…貴方は友達の事になる  
とすぐ周りが見えなくなるんだから…」

オーリスさんは俺を心配し、少しあきれたような声で話す。

「あはは…気をつけます」

「うむ！ではまたなコウタ！新部隊でしっかり頑張れよ！」

「私達で力になれる事があればいつでも言ってね」

「はい！ありがとうございます」

二人に頭を下げ、その場を後にする。…あんな人たちが…家族だっ  
たらいいのにな…

——そして、機動六課への出向の日が来る——

## 第九話「休暇と食事？」（後書き）

私の作品における大きな原作変更点？

・レジアスとゼスト（ドゥーエも）生存

渋いおっさんキャラが結構好きなので、殺してしまうのはもったい。そしてそもそもそういうシーンがうまく書ける自信がない。

・綺麗なレジアス

この作品のレジアスは、スカリエッティとは一度手を組むも、ゼストの件により決別し、現在は過去の行いを悔んでいる。という設定です。

しかし上層部及び評議会、自身の立場もあり思うように行動できずにいる。

とまあこんな設定です。

今回は完全なオリジナル話：そして主人公は過去に馬鹿をやって取り押さえられています。

詳細は後に明かすとして、その行動がレジアスと知り合うきっかけとなり。レジアスが忘れていた志を思い出すきっかけになりました。

なのはシリーズには圧倒的にナイスミドルが足りない！…おっさんかっこいいよおっさん

次回、原作に戻りいよいよ機動六課が動き出します。

小説好きさん、指摘ありがとうございます。どうも私は勘違いで覚

えてることが多いみたいで、他にも間違いがありましたらまた教えてください。

## 第十話「稼働と出会い？」（前書き）

今回からアバンタイトル付けてみました

## 第十話「稼働と出会い？」

試験、勧誘、そして再会…

かつて望んだのは平穩…

今望むのは、自分の変化…

自分自身は変わらないまま、状況だけは速足に変わっていく…

俺は、この新しい場所で何かを見つけられるのだろうか？

魔法少女リリカルなのはStrikersへ孤独の歌が始まります。

今日からいよいよ新部隊のスタートとなる。現在、簡単なオリエンテーションを終えた俺達は、全員集められ八神二佐…もとい機動六課課長の挨拶を待っていた。

一つ疑問に思うのは、男女比率である。女性隊員に比べ男性隊員が少なすぎる。フォワード陣に至っては俺のほかにあと一人だけと聞いている。何か理由があるんだろうか？…まあ俺が考えてもしようがないか…

少し思案していると、八神部隊長が一步前へ出る。

「機動六課課長。そして、この本部隊社の本部隊長、八神はやてです。」

皆と一緒に拍手をするが…変な違和感を感じ目を切り替える。

なんだ…あれ？

俺の目に写ったのは、八神課長だけでなく…隊長格全員に見える…魔力を押えこむ輪のようなもの。

何人かは分からないが、なのはさん、フェイトさん、八神課長の三人は依然見ているのでわかる。魔力がかなり抑え込まれている。以前見た時は驚愕するほどの魔力だったのに…今はAランクより少し上程度に見える。あれ…いったい何なんだろう？

それにあの…狼？使い魔なのかな？俺より魔力大きいんですが…

「——以上ここまで、機動六課課長および部隊長、八神はやてでした！」

考えてる内に、八神部隊長の挨拶が終わる。やっべ…全然聞いてなかった…

周りに少し遅れて慌てて拍手をする。…気が緩んでるのかな？俺…さっきから考え事ばっかだ。

フエイトside

——ヘリポート付近・通路——

ヘリポートへと続く通路を、シグナムと一緒に歩いている。

「シグナム、ホント久しぶりです」

「ああテストロッサ。…直接会うのは半年振りか」

「はい、同じ部隊になるのは初めてですね。どうぞよろしく願います」

「こちらのセリフだ。だいたいお前は私の直属の上司だぞ」

「それがまた…なんとも、落ち着かないんですが…」

シグナムの言葉に苦笑しながら答える。絶対私よりシグナムの方が

隊長向きだよ。

「上司と部下だからな、『テストロツサ』に『お前』呼ばわりもよくないか…敬語で喋った方がいいか？」

「あう…そういう意地悪はやめてください…いいですよ、テストロツサで、お前で」

「ふっ…そうさせてもらおう」

私が慌てて返すとシグナムは、冗談だと言わんばかりに笑う。うう…絶対わざとだ…

フエイトside end

——訓練スペース付近・通路——

「残りのフォワード二人って、どんな人たちなんだろうね？楽しみだね！」

「アンタ達みたいに手のかかる奴じゃないことを祈るわ」

俺達は今、残りのフォワードと合流予定の場所へ向かっていた。ちなみに俺はフェイトさんが隊長を務める『ライトニング分隊』に所属することになった。コールサインはライトニング05。

スバル達と分けられるのは意外だったが、そちらの分隊にはセンチガードがいないらしく、前線指揮を、というわけで俺が回されたらしい。…たぶんあの子たちだよな？

「たぶん、右端辺りに居た子供二人がそうだと思うぜ？」

魔力的に…

「ええ！あの子たちが！？…まだちっさかったよ？」

「…だからだよ。あの歳でバックヤード要員ってのはないだろ？だったらフォワードじゃないか？」

目の事は言わない。俺のこの目については書類等にも書いてないし、知ってる人はいない。…なぜか？…いや特に今のとこ使い道も思いつかない能力なのに、レアスキル持ちってカウントされなくなかったと言ってない。

「正解みたいね…あの子達でしょ」

ティアの言葉に前を向くと、姿勢よく二人の子供が立っていた。

「えと…君達が残りのフォワードかな？」

スバルが二人に問いかける。

「はい！エリオ・モンディアル三等陸士、10歳であります！コールサインはライトニング03で、ポジションはガードウィングです！よろしく願います！」

赤髪の少年が、敬礼と共に元気よく答える。

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！モンディアル三士と同じく10歳であります！コールサインはライトニング04で、ポジションはフルバックです！よろしく願います！こちらは私の竜でフリードと言います！共々よろしく願います！」

「キュクル〜（よろしく〜）」

エリオに続き、ピンクの髪をした少女もとても10歳とは思えない丁寧な挨拶をする。…うん？今その竜の言葉が聞こえた気が…あれ？つと、挨拶返さないと…

「スバル・ナカジマ二等陸士。15歳、コールサインはスターズ03、ポジションはフロントアタッカーだよ！よろしくね」

俺がまた考え事をしている間にスバルが先に挨拶をする。

「ティアナ・ランスター二等陸士。16歳、コールサインはスターズ04、ポジションはセンターガードよ」

スバルに続きティアが簡潔に挨拶をする。

「コウタ・エルザード二等陸士。15歳、コールサインはライトニング05、ポジションはオールラウンダー、二人と同じ分隊になるから、よろしくな」

ティアに続き俺も挨拶をする。

「「よろしくお願いします!」」

「キョクル」（よろしく）

二人は敬礼をし返す…てかやつぱ聞こえる!?

「えと…キャロだったよね?ちょっと聞きたいことがあるんだけど…」

「はい!なんでありましょうか!エルザード二士!」

…う、うゝん。

「質問の前に、二人とも俺の事はコウタでかまわないよ?後、話しやすい口調でいいよ?」

「「え?でも…」」

俺の言葉に二人が少し詰まる。

「同じ新人フオワードなんだし、遠慮はいらないって」

「そつだよ!私の事もスバルでいいからね!」

「ええ、階級も大して変わらないんだから気にしないでいいわよ」

俺の言葉にスバルとティアも同調する。

「「わかりました！」」

うん…まだちょっと硬いな…まあ徐々にでいいか

「それでコウタさん、質問と言うのは？」

「ああ、うんフリードの事なんだけど…その竜って人の言葉話すの？」

「え？…いえ、賢い子なんで、こちらの言葉は理解してるはずですが…人語を話したりは出来ません」

俺の質問にキャラが応えてくれるが…うん？どうなってるんだ…

「コウタ…なにいつてるの？さっきからキュクルっとしか鳴いてないじゃん」

やっぱそうなのか…

「…悪い、竜って初めて見てな…もしかしたらって」

「ふゝん以外とコウタって——痛い！」

なんか失礼な事を言おうとしたスバルをはたいとく…なんで聞こえるんだろ？

「まあ、自己紹介も済んだんだし、早くいきましょ？なのはさん待ってるわよ」

ティガが声をかけてくる。

「訓練か…気が重いなあ…さぼっちゃ——駄目ですねわかりました」

俺の言葉にティアが拳を作る…バリアジャケット越しであのダメー  
ジ、生身で受けたら死ぬぞ…

「じゃ！皆いつくよ」

「はい！」

スバルが歩きだしそれにティア、エリオ、キャラの順番で続く…フリードは俺の隣に来て。

「キュキュク、キュイキュイ？（コウタさんは私の言葉がわかるの？）」

「…なぜかわかるんだよ…まあ、考えてもしょうがないか、これからよろしくなフリード」

「キュイ！（はい！）」

先を歩く四人に追いつくために、少し速足で歩きだす…うーんどうなってるんだ？



## 第十話「稼働と出会い？」（後書き）

訓練が…始って…ないだと…

次回が長くなる予定なので今回は少し短めです。

後々明かされる予定ですが、フリードの言葉がわかるのは主人公のレアスキルに関係しています。

リスカさん、yukiさん感想ありがとうございます。これからも楽しんでいただけるよう頑張りたいと思います。

## 第十一話「訓練と復習?」(前書き)

ちょうど投稿開始から1週間

## 第十一話「訓練と復習？」

動き出す機動六課…

そして同じフオワードの2人との出会い…

それぞれ初訓練に向け期待と不安を募らせながら…

訓練の始まりを待つ。

魔法少女リリカルなのはStrikers 孤独の歌 始まります。

### 機動六課訓練スペース

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入っているから。大切に扱ってね。それとメカニックのシャーリーから一言」

なのはさんと合流して、訓練スペースまで来た俺達、訓練着に着替え、ウォーミングアップのランニングを終えた俺達は、なのはさんともう一人、眼鏡をかけた茶髪のロングヘアの女性の前に一列に並び説明を受けていた。

「えゝメカニックデザイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。皆はシャリーと呼ぶので、よかつたらそう呼んでね。皆のデバイスを改良したり、調整したりもするので時々訓練を見せてもらったりします。…あ、デバイスについての相談があつたら遠慮なく言つてね。」

「……はい!」「……」

シャリーさんの挨拶にそろつて返事をする俺達。…デバイスマイスターか、今度A Iプログラムの件で相談してみようかな…

「それじゃあ、さつそく訓練に入ろうか」

「は、はい…」

「ここで…ですか?」

なのはさんの言葉にスバルとティアが返す。

確かに今、俺達の前には海に浮かぶ小さな人工島みたいな物しかない。あそこで訓練するにしても障害物も何もないな…

「シャリー?」

「はい」

なのはさんの言葉に、シャリーさんが端末を展開する。

「六課自慢の訓練スペース、なのはさん完全監修の陸戦用空間シミュレーター…ステージセット!」

端末の操作が終わると、俺達の目の前に小さな街が現れた。…すげえ

—— 訓練スペース付近 ——

訓練スペースを静かに見つめる赤髪の少女に、シグナムが近づく。

「ヴィータ…ここにいたのか」

「…シグナム」

「新人達、さつそくやっているようだな」

「…ああ」

ヴィータと呼ばれた少女は、見た目に合わぬ落ち着いた様子で返す。

「お前は、参加しないのか？」

「五人とも、まだよちよち歩きのヒヨッコだ。私が教導を手伝うのはもうちょっと先だな…」

「そうか」

シグナムの問いかけに、ヴィータは新人達を見つめながら答える。  
そして付け足すように、

「それに自分の訓練もしたいしさ。同じ分隊だからな。私は空でなのは守ってやらなきゃならねえ」

「…頼むぞ」

ヴィータの言葉を受け、シグナムは何かを思い出すように前を見た。

——訓練スペース——

今俺達は、訓練スペースの設定中ということで体をほぐしながら待機していた。

スバルはエリオと話し、ティアはキャラと話している…あぶれた俺はフリードト話していた。

「——キュル、キュイキュイ！（って感じの攻撃だよ！）」

「へえ…炎か、それは強力そうだな。さすが竜って感じだね」

「キュックイ！（えっへん！）」

ブラストフレアという技の説明を受けて、俺が感心する。するとフリードは、俺の頭の上で体を反る。…かわいいな、こいつ。

どうやら言葉がわかるのがよほど嬉しいらしく、完全に懷かれ、さつきからずっとフリードは俺の頭の上に乗っている。

「よし！準備できた。皆々始めるよ」

なのはさんの指示に従い、俺達はジミューターの町へ移動する…  
すげえこれ触れるよ、立体映像とかじゃないんだ…

俺達は簡単な作戦会議をして位置に就く、今回は初めと言うことで俺はセンターガードとして動く。

『よしつと、皆聞こえる？』

「「「「「はい！」「」「」「」

『じゃ、さっそくターゲットを出していこうか、まず軽く10体くらいね』

『動作レベルC、攻撃制度はDってところですかね？』

『うん』

『わたし達の仕事は、搜索指定ロストログアの保守管理、その目的の為に私達が戦うことになる相手は…これ！！』

なのはさんとシャーリーさんの声が聞こえ、目の前にターゲットが10体現れる。

『自立行動型の魔導機械。これは近づくと攻撃してくるタイプね。攻撃は結構鋭いよ！』

シャーリーさんがターゲットについて説明してくれる。

魔導機械：確かに見てみると魔力が見える。…あの周りの膜みたいなのはなんだろう？バリア？

『では、第1回模擬戦訓練。ミッション目的、行動するターゲットの破壊又は捕獲。15分以内！』

「「「「はい！」「」「」「」

『それではミッション…スタート！』

なのはさんの開始の合図と共に、ターゲットが一斉に動き出す！

同時に、スバルとエリオはターゲットを追い、ティアとキャロは右のビルへ、俺はティア達が狙えない位置をカバーするため左のビル

へと登る。

「はぁぁぁあ!!」

スバルが掛け声とともに跳び、リボルバーシュートを放つ!が、ターゲットは素早い動きで散開し攻撃をかわす。

「…え、何これ!動き早!？」

その先に待ち構えていたエリオが、魔力の斬撃を飛ばすが、それも簡単にかわされる。

「だめだ、ふわふわ避けられて…当たらない…」

(前衛二人!分散しすぎ!ちょっとは後ろの事を考えて!)

(攻撃も分散しすぎだ!連携して狙え!)

二人に俺とティアが念話で注意を叫ぶ!

(あ、はい!)

(ごめん!)

ターゲットが先の進路で合流したのを確認し、俺とティアが射撃の態勢に入る!

「キャロ…威力強化お願い!」

「はい!ケリユケイオン!」

ブーストアップ・バレットパワー

ティアの声に応え、キャラがブースト魔法を発動する！…威力強化がほしいのはむしろこっちだよ…

と思っただけ、やっぱりこちらも強化してくれている。キャラ…すげえな、補助魔導師はあんま見たことなかったけど、二人に同時にかけられるのか…

（コウタ！）

ティアから念話が届く、タイミングを指示しろってことか…

俺はすぐ指を一本立て、それを降ろす！

「シュート！」

俺とティアの声が重なり、ターゲットに魔法弾が向かう…が！

ティアの攻撃はターゲットに当たる直前でかき消える！…俺の攻撃はサイズが小さくなり…コッソンといった感じで弾かれる…今のは…

「バリア！？」

「違います！…フィールド系？」

「魔力が消された！？」

…いや、俺の弾が当たったってことは…魔力を消滅させるようなも

のじゃないはず…

『そう、ガジェットドローンにはちょっとやっかいな性質があるの。  
【アンチ・マギリング・フィールド】…通称AMF。効果範囲内の  
魔力結合を解いて魔法を無効化すから、普通の射撃は通用しない』

…なるほど、俺の弾が消えなかったのは、魔力密度が高く、サイズ  
が小さいためか…

『…それに』

「あ！くそ…こ、この！」

高く跳びあがったターゲットを追うため、スバルがウィングロード  
を…やばい！

「スバル！冷静になれ！」

俺は即座に魔法の発動の準備をする。ターゲットが、魔力結合を解  
く…ことは…

「スバル！馬鹿！危ない！」

ティアも同じ事に気付いたのか慌ててスバルを止めようとするが…

『…AMFを全開にされると…飛翔や足場作り。移動系魔法の発動  
も困難になる』

「うえ！？うわあわわわ！？！？」

ウィングロードが先端から消え始める！？…間に合えよ…

「きゃああああー！？」

スバルがウィングロードから落下する瞬間！

「ホールディングネットー！！」

ギリギリ間に合った俺の魔法により、スバルはビルに当たる寸前でネットに収まる。

（大丈夫か！スバル！）

（う、うん…ありがと、コウタ）

まったく…

『まあ、訓練では皆のデバイスにちよつと細工をして、擬似的に再現しているだけなんだけどね、でも現物からデータを取ってるし、かなり本物に近いよ』

シャーリーさんが嬉しそうに説明する。

スバルの無事を確認した俺は、作戦を決めるためティアの居るビルへと移る。

「どうする？ティア」

「うん…キャロ、手持ちの魔法と…フリードの技で、何とか出来そうなのある？」

「…試してみたいのが、いくつか…」

「…あたしもある、コウタは？」

「俺の弾は一応、当たるとこまでは行くみたいだからな…一番威力のあるのをぶつけてみる」

（スバル、エリオ…先行して敵の足どめしてもらいたい。可能なら固めて数を減らしてくれるとありがたい）

方向性の決まったところで、俺は前衛の二人に念話を飛ばす。

（何か手が浮かんだの？）

（それぞれ…ね、いけるかしら？二人とも）

（おっけー任せて！）

（や、やってみます！）

（よし、頼んだぞ二人とも…）

念話を切り、俺も準備を開始する。

「…カートリッジ…フルロード」

ビルの屋上で訓練を見守る二人。

「へえ…皆よく走りますね」

「危なっかしくってドキドキだけどね…デバイスのデータは採れそう?。」

「いいのが採れてます!五機とも良い子に仕上げますよ、ただ…」

「うん?」

「スバルとコウタのデバイスについては、難しくて…」

「スバルは先天性の魔法の解析に時間がかかるのはしょうがないとして…コウタのは?」

「オールラウンダーって特性上、どうしても難しくなりますね」

苦笑しながらシャーリーが応える。

「なるほど…じゃあコウタに直接相談してみたらどうか?あの子デバイスについてかなり詳しいし、自分なりに改良案とか考えてるかも?。」

「なるほど…それはいい考えですね」

――訓練スペース――

さて、チャージは完了。後はタイミングか…

「いくよ！ストラダ！カートリッジロード！」

エリオが橋を破壊し2体のターゲットを押しつぶす。だが、残り2体は上空へと逃げる…そこへ上空からスバルが、攻撃する！

「潰れてろ！！」

が、やはり魔力による身体強化も無効化されるためか、大きなダメージはない…

「それなら！」

後ろから迫るターゲットに馬乗りになり、リボルバーナックルを叩きこむ！

「うりゃああああ！」

そのままリボルバーナックルの回転力を利用し、拳を深く突き刺し破壊する！…残りは7体！

「連続…行きます！フリード！ブラストフレア！」

フリードが、吐いた炎は2体のターゲットに向かい…高熱によりショートさせ動きを止める！

「我が求めるは、戒める物、捕える物、言の葉に応えよ…鋼鉄の縛鎖…錬鉄召喚！ アルケミックチェーン！」

キャロの詠唱と共に魔法陣から現れた鎖は、動きの止まったターゲット2体と、上空へと逃げようとしたターゲット1体を捕獲する！  
…残り四体！

俺はキャロの居るビルの真下で、炎から逃れた2体を追う！

「フリード！ターゲットの前方にブラストフレア！」

「キユクイ〜！（了解〜！）」

「えええ！何で言うこと聞くのフリード！？」

俺の指示に、フリードが再び炎を吐く…キャロはフリードが俺の指示に従ったのに驚いている。

進路を炎で塞がれたターゲットは、右手にある一直線の道に逃げる。

「直線状に並んでくれなきゃ…同時破壊できないしな…俺」

俺はターゲットに狙いを定め、2体のターゲットが重なった瞬間！

「ソニックバレット！！」

ソニックバレット…加速のみを最大まで強化した、現在俺の持つ最高威力の魔法だ。

圧縮された弾は、AMFで多少威力を弱めるも、その圧倒的な弾速で手前のターゲットを貫き、少し遅れて爆発する…！だが、奥に居たターゲットは大きくへこみはしている物の、破壊には至ってない。

「ッチ！…ソニックムーブ」

舌打ちと共に、へこんだダメージで動きの鈍っているターゲットを逃さないように加速魔法を発動させ、銃剣を前に構え突撃する。

ターゲットの直前でソニックムーブはかき消されるが、加速した銃剣はそのままターゲットを貫く！

銃剣を抜き、ターゲットから離れると図ったようなタイミングでターゲットは爆発する…これで残り2体！

（スバル！私がかからしとめるから！そのまま追ってて！）

ティアの念話が聞こえ、道路の方に目をやると、残った2体のターゲットに向かってティアが射撃の態勢に入っていた。

「攻撃用の媒体を無効化されないように…膜状のバリアでくるむ！フィールドを突き抜けるまで外殻のバリアがもてば…本命の弾はターゲットに届く…！」

ティアは、生成した魔力弾にさらに上から魔力の膜をかぶせていた…おいおい、それは俺達のランクよりかなり上の魔法だろ…

—— 訓練スペース・屋上 ——

「魔法弾！？AMFがある上、コウタみたいに圧縮して密度を高め

てるわけでもないのに……」

いいえ、通用する方法があります

シャーリーの疑問にレイジングハートが応える。

「うん…フィールド系の防御を突き抜ける多重弾殻射撃。… A A ランクのスキルなんだけどね」

「A A ランク!？」

—— 訓練スペース ——

「固まれ…固まれ…」

ティアの言葉と共に弾を外殻が固め発射の準備が整った！

「ヴァリアブルシュート…!!」

放たれたオレンジ色の魔法弾は、1体ターゲットを貫き…そのまま威力を落とすことなく、最後の一体を破壊する！

（すげえなティア…よくあんな高度な魔法を…）

（ティアくナイスだよ！やったね♪ さっすが〜！）

（…二人とも…うるさい…これぐらい…当然よ…）

相当消耗してるな…まあでも、これでターゲット全滅完了…だな、  
訓練は終わりじゃないだろうが…

——その後、少しの休憩をはさみ訓練は夕方まで続いた…

## 第十一話「訓練と復習?」(後書き)

うん…わかってた…一話じゃ終わらないことぐらい…Orz

戦闘シーン…難しい…でもこつからどんどん増えるんだよなあ…

つ、次で何とか…

Yukiさんまたまた感想ありがとうございます。頑張ります。

Fさん誤字指摘ありがとうございます。他にも質問等があればいくらでもどうぞ…ちゃんと答えられるかは…あれ…ですが…

## 第十二話「訓練と復習?」(前書き)

今現在、年末キャンペーンでStrikersのDVDをレンタルして見直してます…あれ?こんな展開だったっけって思うのが何か所かw

## 第十二話「訓練と復習?」

機動六課での初めての訓練…

AMFを搭載した魔導機械との戦闘…

皆疲れ、日は沈んでいった。

魔法少女リリカルなのはStrikers 孤独の歌 始まります。

——機動六課・施設内——

「……はあ…はあ…」

「おい皆、水持ってきたぞ」

俺は、疲れた様子で座りこむ四人に水を渡す。

「…ありがとう…コウタ…」

「…てか…なんで…アンタ…そんな元気…なのよ」

「…ありがとうございます」

「いや…疲れてるよ。水取ってくるぐらいの余力はあるだけだ…」

ティアの問いに答えながら、俺も座り水を飲む…普通初日にここまでやるか？

「皆、立てるか？寝るなら隊舎に戻ってからにしようぜ…後フリード、重い降りろ」

「キューイ！（やだ！）」

立ち上がり、頭の上のフリードに声をかけるが、フリードは即答する…やだっってお前…

「……」

その様子に、突っ込む気力もないといわんばかりに四人は無言で立ち上がり歩きだす。

四人が自室に戻ったのを確認して、俺は静かに隊舎を出て、人気のない場所まで移動する。

—— 林付近 ——

隊舎の近くにある林まで移動し、辺りに人がいないのを確認してから座る。

そして目を閉じゆっくりとイメージする。

… 敵は今日初めに戦ったガジェットドローン… 数は10… 味方はなし…

俺はデバイスを構え、そのままガジェットの中心に魔法弾を撃ち込むが、素早い動きで散開されかわされる…

即座にソニックムーブを発動！先ほど魔法弾を撃ち込んだ位置まで移動する！そこで即座にブリツツアクションで足を組みかえ、散ったガジェットのうち一体に向かって再び加速！

加速した斬撃で、1体のガジェットを破壊！振り向かないままサイ

ドにステップする！

先ほどまで俺がいた地点を残りのガジェットのリザーがえぐる！音を確認し、ポーチからいくつかの小さな鉄の玉を取り出し、音のした方に振り向く！

その鉄の玉を術式によって加速し発射する！一発目！へこみはするが破壊には至らない…二発目！ヒビが入りガジェットの動きが止まる…三発目！動きの止まったガジェットの破壊する！

スクラップバレット…小型の物体を加速して打ち出す魔法…まあ本来別の目的で作ったんだけどAMFには効果的だ。

…後、8体…

四方からレーザーが迫る！それをステップで側しながら、残りの玉を発射！正面の2体に当たるが…破壊できない…瞬間！視線の端にこちらを狙うガジェットが写る！？発射後の硬直で少し回避行動に手間取る！

紙一重でそれをかわすも…目も前の2体からもビームが撃たれ…回避できずに直撃する…

「…だめか」

イメージトレーニングを終え目を開く、あの数を相手にするには切り替えが遅いか…もっと瞬発力を上げて即座に次の行動に移れるようにしないと…

今日の課題は決まった…俺は起き上がり地面に十字の模様を描き、その中心から変則的な反復横とびを始める。

フエイトside

私は地上本部から戻り、自室に向かっていた…隊舎が見えた辺りで、足音の様な物が聞こえる。

「…足音?…こんな時間に…」

不審に思った私は、バルディッシュを手を持ち…気配を殺して音の方へ向かう。

すると…そこには…

ステップの練習だろうか、地面に書かれた十字を変則的に跳ぶコウ

タが居た。

「コウタ!？」

「え?... フェイトさん!？」

思わず声を上げた私に、コウタは驚いたように振り返る。

「どうしたんですか? フェイトさん... こんな時間に」

「それは... 私のセリフだよ。コウタこそなにをやっているの?」

今日は訓練初日のはず... フォワードの子たちはみんな疲れて寝ているって聞いたのに...

「俺は... えと、なんていうか習慣みたいなものでして」

「習慣?」

「ええ、訓練校時代から一日が終わる前に、その日の事を復習して、不足部分のトレーニングをするっていう感じに続けてて、どうもこれをしないと寝つきが悪くて...」

コウタの答えに少し驚く、

「それって... 毎日追加でトレーニングしてるってこと?」

「いや... そこまで大層なもんじゃないですよ。なんていうか... ほん、俺はオールラウンダーじゃないですか」

「う、うん」

「オールラウンダーとして、スバルやティアみたいな専属ポジションの人に付いていくには、どうしたって普通のトレーニングだけでも足りませんしね…」

私は、思い違いをしていたのかもしれない。

「ずっと…一人で？」

幼少時代の様子や、訓練校のデータを見て、この子はなんでも器用にこなす天才だと思ってた、

「え、ええ、まあ」

「…無理はしてない？」

でも、本当はずっと影で努力してたんだ…一人っきりで、

「そこは大丈夫ですよ。ちゃんと次の日に影響が出ない程度で止めておくので」

「そつか…ねえ、終わるまで見ててもいいかな？少しぐらいならアドバイスも出来ると思うし」

私は、この子の事…なにも知らないんだなって思った。

「それは…かまいませんが、フェイトさんは時間とか大丈夫なんで

すか？忙しいんじゃない？」

「大丈夫だよ…それに、私はライティング分隊の隊長なんだから！隊員が無茶しないようにしっかり見はつとかないとね」

私は、コウタの事をもっと知りたかった。だって…

「だ、大丈夫ですよ。ある程度で切り上げますし…」

「でも、心配だから…だめ？」

「わ、…わかりました。でも見ててもつまらないですよ？」

雰囲気や見た目は、あの頃と比べて随分変わった…でも、

「大丈夫！それじゃあここで見せてもらうね」

寂しげな目は、あの頃のままだったから…

その後、コウタは2時間ほどトレーニングを続け、時刻が0時になった辺りで、私にお礼を言い隊舎へ戻って行った。

訓練校時代から…って言ってたよね。4年以上も…一人で毎日？

…コウタはいつたい、何のために頑張ってるの？昇進やランクアップには興味がないって言ってたよね？

でも、こんな努力…何の目的もなく出来るものなのかな？

答えは出ないまま、私はなのは待つ自室へと向かう。

このことは他の人には言わない。たぶんコウタはそれを望まないから…また、様子を見にこよう…

——— なんだかかな？…まるで、一人でいることを望んでるみたいに見えるのは———

## 第十二話「訓練と復習?」(後書き)

主人公の事を一つ知ったフェイト。

あれ?おかしい…私の当初の予定ではメインヒロインはスバルのはずだったのに…なんかスバルの影は薄くて、フェイトがヒロインやってるような…あれ?

次回、いよいよ主人公のデバイスが登場…するかな?

yukiさんいつも感想ありがとうございます。

### 第十三話「開発と双子座？」（前書き）

この話は、本編では詳細のなかった入隊後、ファーストアライトの間辺りの話です。

### 第十三話「開発と双子座？」

機動六課に来てもうすぐ一週間…

新しい環境にも皆慣れ始めていた…

まだ出勤は一度もなく、訓練の毎日…

皆、これから先の実戦に備え力をつけていつていた。

魔法少女リリカルなのはStrikersへ孤独の歌が始まります。

#### 機動六課・食堂

六課に来てから今日で丁度一週間になる。

この一週間でだいたいの流れはわかった。

一日中訓練 一日中訓練 午前中だけ訓練 一日訓練 一日訓練  
午前中だけ訓練 訓練なしって感じた。

いくら前衛部隊と言っても、報告書等のデスクワークも存在するの  
で、週に2日ほど午前中だけ訓練をして午後をデスクワークに当て  
る。

訓練なしの日は、主に自由行動だが24時間勤務のため、外出など  
は出来ない。（部隊長の許可があるなら別だが）…後にちゃんとし  
た休日に変わるらしい？

そして、今日は訓練のない日。今俺達は揃って朝食をとっていた。

「……」

目の前に積まれているトーストの山…もといトーストの乗っていた  
皿の山を見つめ言葉を失う。

スバルがもともと大食いなのは分かっていたが、エリオも俺の3倍  
ぐらいの量を平気で食べる。…大丈夫なのか機動六課の経費…

「キュイ、キュイ（ねえねえ）」

「うん？どうしたフリード」

「……」

俺の頭の上でフリードが何かを言う。俺の頭の上がお気に入りらしく、フォワードで集まる時などはたいがい乗っている。それに対しキャラは、なぜかキラキラした目で俺を見ている。

「キュクイ、キュクイ（それ、ちょくだい）」

そんなことはお構いなしにフリードは、俺の皿のベーコンを見る。

「ああ…それはいいけど頭の上ではやめろ、一度降りろ」

「キュクイ（はーい）」

俺の言葉にフリードは頭から降り、皿の横に着地する。俺はベーコンをフォークで刺しフリードの顔まで持って行ってやる。

「ほら」

「キュク——キュクル（あーん——おいしい）」

俺の差し出したベーコンをおいしそうに食べるフリード…やっぱり可愛いなこいつ。てか六課に来てスバルとティア以外だとこいつと一番話してるかもしれない。…俺が話すんじゃなく一方的に話される人ならもう一人いるが…

「アンタ等…ホント仲いいわね？」

「おかげで、俺の首は筋肉痛だよ…」

頭に戻ったフリードを見ながら、ティアに伝える。

「——あ、あの！」

キャラが何か意を決したように声をかけてくる。やばい仲良くしすぎたか…自分の竜が他人にばかり懷いてたら不機嫌にもなるよな？

「コウタさんって…その…違ってたらごめんなさい…フリードの言葉がわかるんですか？」

あれ？

「あ、ああ…えと、なんとなくは…だけど」

とりあえずお茶を濁す。

「やっぱり！…すごいですコウタさん！」

「すごいって？…なにが？」

「フリードの言葉がわかるのがですよ！きっとコウタさんには召喚師の素質があるんですよ！」

嬉しそうに話すキャラ…こんなテンション高いとこ初めて見たよ。

「もぐ…そういえば…むしゃ…コウタ…ぱく…って」

「おいスバル、話すか食べるかどっちかにしろ」

「じっくん——コウタってさ」

馬鹿な…喋る方を優先しやがった。

「色んな魔法使えるけど…召喚魔法も使えるの？」

「試したことない…ってか、召喚魔導師はそもそも珍しいし、俺達の訓練校の授業でもさわりしか習わなかっただろ？もっと詳しく教えてくれてたら試したかもしれないけどな」

「…コウタ、座学の授業いつも寝てたよね？」

「…ぐっ、いあ…ほらでもちゃんとテストの成績は…」

「私より下だったよね…」

ニヤニヤ腹の立つ笑い顔でこっちを見るスバル…こいつ…

「ほう…いい度胸だスバル…そういうつもりなら俺にも考えがある」

「な…なに？」

俺の言葉に笑うのをやめ聞き返すスバル…

「これからデスクワークは一人でやれよ」

「——！？！？ああああ！ごめん！ごめんなさい！コウタ、お願い！それだけは…」

慌てた様子で俺の肩を持ち、平謝りするスバル…なんでデスクワーク苦手なんだよ訓練学校主席…

「知らんな…成績優秀なスバルさんなら問題なくこなせるだろ？」

「うう…ごめんってコウタ…許してよ、私一人じゃその日のうちに終わらないもん…」

「アンタ等…エリオとキャラが固まってるでしょ…」

やば、二人の事すっかり忘れてた。…エリオはずっと無言でトースト食べてたけど…

「まあ、ともかく試した事がないから使えるかどうかは分からないってことだよ…てかただでさえ希少技能なんだし、使えないだろ？」

「きつと使えますよ！」

話を締めようとした俺に、キャラが声を上げる。ホントテンション高いな今日は…

「あ、ああ…じゃあ、今度簡単な奴でも教えてくれよキャラ」

「わ、私ですか？」

「いや…だって俺ほかに召喚魔導師知らないし」

「わ、分かりました…上手く教えられないかもしれませんが…私ですよければ」

「あ！私にも教えて！」

スバルが反応して手を上げる。

「…お前は無理だと思う…」

「なんで!？」

「皆さんに教えますよ、誰が使えるかなんて分からないですしね！」

「じゃあ、今日は訓練もないし、腹がこなれたら皆でやってみるか？」

俺の言葉に皆頷く、なんとなくだけど…スバルは無理だろ…後エリオ、忘れてないから寂しげな眼でこっちみんな。

— 林 —

キャロに簡単な、無機物召喚と初歩的な無機物操作を教わって、順番に試す。

スバル、ティア、エリオは発動できず…俺の番

「我が求めるは、戒める物、捕える物、言の葉に応えよ…鋼鉄の縛鎖…錬鉄召喚！ アルケミックチェーン！」

俺の詠唱に反応し、地面に描かれた魔法陣から鎖が飛び出す！…で  
きたよ

だが！…鎖はそのまま『真っ直ぐ』上に伸び『何も捕えず』重力に  
従って落下した…

そっか…召喚魔法って遠隔操作…だったな…

「……」

無言で後ろを振り返ると…

「こ、コウタ…す…ごいよ…ぷっ…やっぱ…器用だね」

肩を震わせながら喋るスバル…

「ホントね…あはは…召喚まで…使えちゃうなんて…ホント…驚き  
だわ…ふふ」

途切れ途切れに話すティア…

「はは…初めは…上手く…いかないのも…しょうがないですよ…」

明らかになにかを噛み殺しながら言うエリオ…

「そう…ですよ…召喚までは…できたんですから…自然落下…する  
のは…初めて見ましたけど…」

フォローするようなことを言いながら、腹を押えてうずくまるキャ  
口…

四人とも後ろ向きで…

「お前ら……人と話す時は顔見て話せて教わらなかったか？」

「だつて……っ！」

何かを言いかけて、口を押えるスバル……

「……笑えよ……」

気を使われる方が、逆にいたたまれない……

「あははははは！」

…俺の言葉を聞いた瞬間、全員はじけるように、笑い始めた…こいつら…

「キュキュク、キュキュクル！（コウタさん、元気出して！）」

「ありがと……フリード、俺の味方はお前だけだよ……」

林には四人の笑い声がしばらく響いていた……

——デバイスルーム——

「召喚魔法の補助機能も付けてください!!」

「ひい!お、落ち着いて…コウタ…いったい何があったの?」

今俺は、デバイスルームでシャーリーさんに詰め寄っていた。

「…実は…」

「———ということが」

「そう…なるほどね、でも召喚魔法も使えるのはすごい事よ」

あれ…意外とちゃんと聞いてくれた。そう思ってシャーリーさんの方を向くと…

「なぜ…頬を…つねっているんですか?」

「き、気にしないで」

…お前もか

「まあ…それは置いといて、俺のデバイスはどうでしょうか？」

二日目の訓練が終わった後で、俺はシャリーさんに呼ばれ以後、新デバイスの製作を手伝っている…といっても、主に自分のデバイスについて意見を言うぐらいだが…

「そ、そうね…コウタが提供してくれたAIの基礎プログラムもしっかりしていたし、コンセプトもまとまったから…うまくいきそうよ」

「そうですか、よかった…」

「ただ…」

うん？シャリーさんが深刻な顔をする。

「何か問題が？」

「ええ…とても重要な問題が一つあるわ…」

シャリーさんの言葉に思わず息をのむ…

「いったい…どんな問題が？」

「……フォームチェンジが…出来ないのよ……」

「……はい？」

シャーリーさんは真剣な顔で訳の分からない事を言った。

「…そのどこが問題なんですか？」

「だって！変形できないのよ！」

「…は？」

何言っただこのメガネ…

「…すみません、意味がわからないのでもっと詳しくお願いします」

「貴方は元々すべての距離で戦ってたから…距離に合わせてフォームチェンジする必要がない！つまり…ロマンが足りないのよ！」

「…スバルとキャロも形状変化はない構造だったと思うんですが？」

「そうね…でもスバルにはもう一つのデバイス、リボルバーナックルがあるし…キャロにはフリードがいるでしょ？」

「そうですね」

「でも貴方のは、今のところ今までのと形も変わらないし、何か変化がほしいところなのよ」

「…帰っていいですか？」

「だめ」

困った…まだ数日の付き合いだが、この人はどうも拘りと言うか、  
なんというかメカオタクとも言ってしまうところがあり、熱くなる  
もののすごく楽しそうに、機械技術論的な物を話し始める…今まで  
話についてこられる人が少なかったと言っていたので…たぶんそれ  
が原因だろう。

「———というわけで、独創性は絶対に必要だと思っの！」

「…ハイ、ソノトオリデスネ」

あれから…2時間たった…

「で、コウタ…何か良い案ないかな？」

2時間かけてようやく本題に戻ったようだ…

「…うゝん、ディアのみたいに2丁にする…とか？」

なにも言わないとまた、関係ない話に移行しそうなので思いついたことを言う。

「！？…なるほど…双銃剣ね。確かにそういうのは少ないし面白いかも！」

どうやら気に入っていただけたようだ…双銃剣なんて使ったことないけど…

「じゃあ…その方向で…お願いします。俺はそろそろ「その前に！」…？」

「このデバイスの名前、何にする？」

また唐突な…

「名前ですか…うゝん、名前」

それっぽい名前…それっぽい名前…

「じゃあ…『ジエミニ』で」

「ジエミニ？」

「地球にある双子座っていう星座です」

…とりあえず俺の誕生日が6月7日なので…

「なるほど…双銃剣…つまり2丁の武器、そして近距離遠距離の二つの顔…それを双子に見立てたわけね…いい名前ね！」

「…え？…いあ」

適当につけたただけなんだけど…

「うん？」

「い、いえその通りです！」

もちろんそんなこと言えるわけもなく…俺のデバイスの名前はジェミニに決定した。

「じゃ、じゃあこれで終わりですね…俺は自「じゃあ次はモード2に当たる部分のプランを練りましょうか！」——ハイ？」

——その後、俺の新デバイスに付いての話し合いは…日付が変わるまで続いた——

### 第十三話「開発と双子座？」（後書き）

シャーリーはデバイス設計について話せる人が、いままで少なかったため、主人公をよく話し相手にしています。

キャラは自分と同じ召喚師が増えることを期待して、主人公に召喚魔法を指導しています。

そして主人公は召喚魔法も素質がありました…でも召喚獣なんて使わせる予定はありません！…宝の持ち腐れが増えただけです。

がうさん、感想ありがとうございました。さっそくキャラと少し会話のあった主人公、もっと仲良くなるのはファーストアライト後を予定しています。

泡泡さん、感想ありがとうございます。フェイトは本当に人気がありますね。無論私も大好きです。

yukiさん、いつも感想ありがとうございます。これからも楽しんでいただけるよう頑張ります。

#### 第十四話「教会と初出勤??」(前書き)

今年最後の更新です。

今日から実家に帰郷するので、次の更新は2日の夜か3日になります。

## 第十四話「教会と初出勤？」

機動六課に来て、2週間がたった…

使えた召喚魔法と、動かせなかった鎖…

共に成長してきた友人がいて、再会を望んだ人がいて、新たな出会いもあった…

心のある壁は、とても高くとても遠い…

いつかこの壁を、越える事が出来るのだろうか？

魔法少女リリカルなのはStrikers 孤独の歌 始まります。

スバルside

——父さんとギン姉へ

お元気ですか？スバルです。

私とティア、それにコウタ…三人が機動六課の所属になって二週間になります。

「おはようございます」

「おはよ」

「おはよ…」

本出勤はまだなくて、同期の陸上フォワード五人は朝から晩までずっと訓練漬け。しかもまだ一番最初の第一段階です。

「おはよう！フリード」

「お、フリードおはよ」

「キュル、キュクル」（二人ともおはよ）

部隊の戦妓教官…なのはさんの訓練はかなり厳しいんですが、しっかり付いていけば、もっともっと強くなれそうな気がします。

当分の間は、24時間勤務なので…前みたいにちよくちよく帰ったりは出来ないんですが…

母さんの命日には、お休みを貰って帰ろうと思います。

「…あ！」

「うん？ああ、来たか」

「今日もやるぞー！！」

「「おー！」」

「朝から元気だな…」

「ホントにね…」

じゃあ、またメールしますね——スバルより

スバル side end

——訓練スペース——

「はい！整列！」

「「…はい！」」



「私の攻撃を、5分間被弾無しで回避しきるか、私にクリーンヒットを入れればクリア。誰か一人でも被弾したら…最初からやり直したよ。頑張っていこう!」

「……はい!」「……」

かなり厳しい内容だ。万全の状態ならともかく…訓練が終わって疲労してる体じゃ…

「このボロボロ状態で、なのはさんの攻撃を5分間、捌き切る自信…ある?」

「ない!」

「同じくです」

「…厳しいな」

「じゃあ…なんとか一発入れよう!」

「はい」

「コウタ! アンタは…『あれ』を威力は考えなくていいから撃って頂戴…どれぐらいかかる?」

「了解だ…威力なしでいいなら…1分くれ」

「じゃあ、タイミングは任せるわよ」

「よし! いくよエリオ!」

「はい！スバルさん！」

俺達はそれぞれデバイスを構え、臨戦態勢になる。

「準備はオツケーだね…それじゃ、レディー…ゴー！…」

なのはさんがアクセルシューターを放つ！

「全員撤退！回避！2分以内に決めるわよ！」

「……おう！」「……」

初撃のアクセルシューターをかわし、それぞれ散開する。

俺は土煙に隠れながらビルの影に入り、そのままソニックムーブで  
なのはさんから距離をとる！

「カートリッジ…フルロード！」

威力は考えず、形を保ったまま打ち出せる程度に魔力を圧縮！残り  
は速度に回す！

なのはside

私の放ったアクセルシューターを五人は散開してかわす…うん、いい反応。

直後！後ろにウィングロードが現れスバルの声がする！

「うおおおお！」

スバルが拳を構えて突っ込んでくる。両側のビルには私を狙うティアナとコウタ…

「っ！…アクセル！！！」

スナイプショット

3つのアシュセルシューターを一人に一つ飛ばす！

が！弾が当たると…三人の姿が消える！

「シルエット…やるね、ティアナ——っ！」

顔を上げると、こちらに向かって突っ込んでくるスバル…こっちが本命！

「でりゃああああ！」

ラウンドシールドを展開しスバルの拳を受け止める！

「くう…」

スバルはそのままシールドを突き破ろうと力を込める！私は2つのアクセルシューターをスバルに向かわせる！

「っ！？」

それに気付いたスバルは攻撃をやめバックステップで回避する。

「うん、良い反応……」

「う、うえ……うわあああ」

つてあれ？…スバルはバランスを崩したようで、そのまま滑るよう  
に後退していく。

そのままアクセルシューターに追われるスバル…

「うわあああ！ティア！援護援護！」

スバルの叫びから少し遅れて、4つの魔法弾が飛んでくる…

2つはアクセルシューターに向かい、残りは私をめがけて飛んでく  
る。

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を！」

ブーストアップ・アクセラレイション

背後からキャロの詠唱が聞こえ、振り返ろうとすると2発の魔法弾  
が私に向かってくる！

それを回避していると…

「いくよ！ストラダー！」

エリオの声が聞こえる…なるほどこれが本命の攻撃だね。

上空から来た、フリードの追撃をかわしエリオを迎撃するために向かう…あれ…コウタは？

エリオの方を向いた瞬間！後ろから風を裂く音と魔力反応！

「っ！？」

振り返りプロテクションを発動！

…弾はプロテクションに弾かれ…そのかなり先にコウタの姿が小さく見える…あんなロングレンジからも狙撃できるんだ…ホント色々できるなあ…あの子。

「エリオ！今！」

しまった！？

「いつけええええ！」

スピーアアングリフ

「っ！？」

「てやああああ！」

慌てて振り返るが間に合わない！体勢を整えられないまま、猛スピードのエリオと激突する！

なのは s i d e e n d

俺は、狙撃を行ったビルから、大急ぎで皆の元へ向かっていた。

エリオとなのはさんが激突したのは見えたが、煙に包まれていて様子はよく分からない…

近づくにつれ煙も収まってくる…どうなった？

ミッションコンプリート

俺が着くのとほぼ同時に、レイジングハートの声が聞こえる。

「いたたた…お見事！ミッションコンプリート！」

「ホントですか？」

エリオが聞き返す。

「ほら、ちゃんとバリアを抜いて、ジャケットまで届いたよ」

そう言っただけで自分の左胸の辺りを指すのはさん、そこには小さな焦げ跡があった。…あの体勢でブーストしたエリオの攻撃を受けて…あの程度…どんな防御力してるんだこの人…

「じゃ、今朝はここまで…一旦集合しよう」

「……はい!」「……」

なのはさんはデバイスを解除して、俺達のところへ来る。

「さて、皆もチーム戦にだいぶ慣れてきたね」

「……」ありがとうございます!」「……」

「ティアナの指揮も筋が通ってきたよ…指揮官訓練受けてみる?」

「い、いや…あの…戦闘訓練だけで、いっぱいいいですよ」

「キュ、キュクル（なんか、焦げ臭い）」

「うん?臭い?…っておい!スバル、ローラー!」

フリードの言葉に視線を下げると、スバルのローラーから煙が出ていた。

「あ！うわあやば！…あっちゃ…しまった…無理させちゃった…  
コウタ…これどうにかなる？」

「見せてみる」

慌ててデバイスを外し、俺のところへ来るスバル…でも、これは…

「駄目だな…駆動部分が焼き切れてる。これ直すぐらいなら新しい  
ローラー買った方が早いくらいだ」

「うう…」

俺の言葉にしよげるスバル、

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい？」

「あ、はい…騙し騙しです」

「コウタのはどうかな？」

「今のところ問題はないですが…近い内に、解体してメンテしないと  
もたないですね…」

「…皆、訓練にも慣れてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスに切  
り替えかなあ？」

「新…デバイス…？」

ああ、あれ完成したんだ。前にスバルのデバイス製作を手伝ってか  
ら見てなかったな…

「じゃ、一旦寮でシャワー使って、着替えてロビーに集まるうか」

「……はい!」

「ん?あの車って…」

俺達が話しながら寮に向かっていると、黒いスポーツカーが俺達の前で止まる。

「フェイトさん!八神部隊長!」

車の窓と屋根が消え、フェイトさんと八神部隊長が見え、キャロが驚いたように叫び、二人が応える。

俺達も挨拶を返しながら車に近づく。

「すごい!これ、フェイト隊長の車だったんですか?」

「そつだよ、地上での移動手段なんだ」

「皆、練習の方はどないや？」

「あ、え」と…」

「頑張ってます」

八神部隊長の言葉に、スバルは少し迷い、ティアナが代表して答える。

「エリオ、キャラ、コウタ…ごめんね。私は三人の隊長なのに…あんまり見てあげられなくて」

フェイトさんが申し訳なさそうに言う…俺の自主練には二日に一度ぐらい顔出してるけど…やっぱり日中は忙しいんだろ…」

「あ、いえ…そんな…」

「大丈夫です」

「気にしないでください」

エリオとキャラは、フェイトさんを心配させないように返す。子供なんだし、もう少し甘えてもいいと思うけど…」

「五人とも良い感じで慣れてきているよ。いつ出動があっても大丈夫！」

「そうか、それは頼もしいな」

「二人は…どこかにお出かけ？」

「ちよつと6番ポートまで…」

「教会本部でカリムと会談や。夕方には戻るよ」

教会本部…たしかベルカ自治区だったけ？訓練校と同じ北部だったけど…あの辺はあまり行ったことないなあ…

「私は昼前には戻るから、お昼は皆で一緒に食べようか？」

「……はい！」「……」

「ほんならな」

そう言つて出発する二人を、俺達は敬礼し見送る。

前から思つてたけど…八神部隊長の関西弁？…俺はともかくミッド生まれの人に通じるのだろうか？

フエイトside

私は6番ポートに向かう途中、はやてに話しかける。

「聖王騎士団の魔導騎士で、管理局本局の理事官…カリム・グラシアさんか…私はお会いしたことないんだけど…」

「あゝそやったね」

「はやてはいつから？」

「私が教会騎士団の仕事に派遣で呼ばれた時で、ラインが生まれたばっかの頃のはずやから…8年ぐらい前かな？」

「…そっか」

8年前と聞き…少しコウタの事を思い出す。

「カリムと私は信じてるものも、立場も、やるべき事も、全然ちゃうんやけど…今回は、二人の目的が一致したから…そもそも、六課の立ち上げ、実質的なところをやってくれたんは、殆どカリムなんよ」

はやては嬉しそうに話す。

「そうなんだ」

「おかげで、私は人材集めの方に集中できた」

「信頼できる上司って感じ?」

「うん、仕事や能力はすごいんだけど…あんま上司って感じはせえへんな。どっちかっていうと…お姉ちゃんって感じや」

「ふふ、そっか」

きつと、いい人なんだろうな…会ってみたいな。

「まあ、レリック事件が一段落したらちゃんと紹介するよ。きつと気が合うよ…フェイトちゃんもなのはちゃんも…」

「うん、楽しみにしてる」

レリック事件…出来る事なら早く解決してほしいけど…

#### 第十四話「教会と初出勤??」(後書き)

…これかなり長くなりそうだ…出来れば3話ぐらいで終わらせたい…

リスカさん、感想ありがとうございます。後その発想力私に下さい。

d a m u d a m uさん、感想ありがとうございます。見た目までお  
けらに…( ;、D、 )…確かに黒のロングコートとかにして後ろか  
ら見たら…コートは白にしよう

## 第十五話「教会と初出勤??」(前書き)

あけましておめでとございます。

今年もよろしく願います。

そう言えば、今更ながらStrikersの漫画版を購入しました。アニメじゃ、あまり詳しく書かれてなかった訓練校の部分が書かれてるのがいいですね。この辺のエピソードもいづれ書いてみたいものです。

## 第十五話「教会と初出勤？」

激しさを増す訓練…

所々無理が出始めるデバイス…

六課稼働から2週間…

新しい相棒との出会いが迫る。

魔法少女リリカルなのはStrikers 孤独の歌が始まります。

—— 六課・男子シャワールーム ——

「驚いたな、エリオが俺達の居た訓練校に来たことがあるなんて…」

「フェイトさんに見学に連れて行ってもらったんですが、コウタさん達の事はよく覚えてますよ」

同じシャワールームに入り会話をする俺とエリオ、初めは槍術をどこで習ったかから発展していた。

ちなみになぜ同室のシャワールームかというと、俺がエリオの頭を洗っているからだ。俺とエリオは同じフォワードで行動時間も近いため、夜の入浴なども殆ど一緒に行っている。その際に苦戦してたエリオを手伝ったのがきっかけで、最近はよく洗っている。

他人の頭なんて洗ったことがなかったので少し不安だったが、意外と気持ち良さそうにしてくれているのでよかった。

「へえ、そんなに特徴的だったかな？…どんな場面を見たんだ？」

「え」と…確かスバルさんがものすごい勢いで突っ込んだり、テニアさんが凄く高く放り投げられたりしてた時ですね」

「…あ、あの時ね…そりゃ印象にも残るか…っと流すよ」

「あ、はい！いつもすみません…洗っていただいて」

「気にするなって…てかエリオはまだ10歳だろ？もう少し周りに甘えたっていいと思うよ」

実際エリオ、しっかりしてるよな…なんとなく近い境遇を感じる。しっかりしようとしたんじゃない…しっかりするしかなかった…みたいな感じか？

フェイトさんの保護児童って話だし…いろいろあったんだろうな。

「そうでしょうか？……でも、なんかこついのいいですね…」

「うん？」

「い、いえ！僕今まで、周りに男の人ってあまりいなかったの…」

「あゝ、そういえばフェイトさんの知り合いつて女性ばかりだな」

「はい…フォワードにコウタさんがいてよかったです」

年頃だもん…周りが女性ばかりかだといろいろ気を使うのか…

「まあ、エリオの年頃だと異性には気を使っちゃうか…」

「あはは…はい…」

俺は、置いてあったタオルを取って、エリオの頭を拭いてやる。

「こ、コウタさん！拭くくらいは…自分で」

「いいから、このくらい甘えとけよ」

「……………はい」

少し慌てたエリオだが、俺の言葉に素直になったのか、気持ち良さそうに目を細める。

弟が居たら…こんな感じなのかな？…俺よりしっかりしてそうだけ  
ど。

—— 六課・女子シャワールーム ——

「えっと、スバルさんのローラーブーツとティアさんの銃、それに  
コウタさんの銃剣ってご自分で組まれたんですよね？」

「うん、そうだよ」

「訓練校でも、前の部隊でも…支給品って杖しかなかったのよ」

キャロの質問に、スバルとティアナが答える。

「私は魔法がベルカ式な上に、戦闘スタイルがあんなだし…ティア  
もカートリッジシステムが使いたいからって…コウタは、自作して

持ち込むのが普通だと、勘違いしてたみたい」

「まあコウタはともかくとして、そうすると私達は自分で作るしかないじゃない、訓練校じゃオリジナルデバイス持ちなんていなかったから、目立つちゃってね」

「あ！もしかしてそれで、スバルさん達、お友達になったんですか？」

「うーん、私とコウタは元々幼馴染だったからね、ティアとはキャラの言うとおりだよ」

「腐れ縁と私の苦悩の日々の始まりって……」

「あははは……でも、なんだかんだで一番目立ってたのはコウタだったよね」

「そうなんですか？」

「まあ私達と同期……いや同じタイミングで訓練校に居て、アイツの名前知らないやつはいなかったわね」

「いろんな意味でね」

「そんなに凄かったんですか？」

驚いて聞き返すキャラに、あきれたような顔で話し始めるティアナ。

「凄いというか……まず一つ目は、デバイスね」

「デバイスですか？」

「そう、あいつ訓練校に入るまで殆ど魔法とか使ったことなかったみたいで、自分にどんな物が合うのか分からないって、コロコロデバイスを作り変えてたのよ…インテリジェンス以外だったけどね」

「ええ！？」

ティアの言葉に驚くキャラ。

「でも、コウタの凄いとこは、ベルカ式以外殆ど使えちゃったところだよ」

「使えたとしても…毎度毎度戦闘スタイルを変えられて、私は大変だったわよ…」

「あはは…一つ目はってことは他にもあるんですか？」

ティアナの言葉に苦笑しながら、質問を続けるキャラ…

「ええ…というかもう一つの方が、あいつが有名だった最大の理由よ」

「同期生への暴力行為で、謹慎処置7回だっただけ？」

「…8回よ」

「ええええ！？…こ、コウタさんて…実は怖い人なんですか？」

「ううん、そんなことないよ」

怯えながら聞き返すキャロに、スバルは笑顔で答える。

「まあ…相手に非があったから、謹慎ですんでたわけだしね」

「えと…相手の人が悪かったってことですか？」

「そうね…私達は初めの方は、成績もよくなかったんだけど…スバルが自分の力をコントロールできるようになって、コウタがオールラウンダーのスタイルに落ち着いた頃から一気に成績が上がってね。総合訓練はトップばっか取るようになってね…そうになると妬みや嫉妬も多くなる」

「……」

ティアナの言葉に少し寂しそうな顔をするスバル

「殆どは、陰口だったし、ほおっておいたんだけど…いつだったか、座学の授業中にスバルの事を『親のコネで成績をとってる卑怯者』って皆の前で言った奴が居てね」

「酷い…」

「そうしたら、寝てたはずのコウタがいきなりそいつに掴みかかって、そのままボッコボコにしちゃってね。で、次の日に謹慎処分…確かそれが一番初めね」

「うん、その後も、私やティアが酷い事言われたり、酷い事されたりすると…次の日に必ず『コウタ・エルザードを暴力行為で謹慎処分とする』って張り紙が貼られてたね」

「それじゃあ…コウタさんはお二人のために？」

「うーん、本人は自分の悪口言われたから殴ったとかいってたけどね…自分がどんな事言われても怒った事なんて無かったもん、コウタ」

「アイツは馬鹿なのよ。自分の事はすごい冷静に見る癖に、友達とか仲間だとかの事になると…自分がどうなるかなんて考えずに行動を起こす。まったくフォローすることこの身にもなってほしいわ」

「そうだね。私に馬鹿馬鹿言うけど…コウタだって十分馬鹿だよね」

悪態をつきながらも…二人の表情は嬉しげだった。

「本当に…三人は仲がいいんですね」

「あはは、なんだかんだで付き合い長いしね」

「おかげで、私は苦勞ばつかわ…まあスバルに対しての苦勞っていう意味じゃ、コウタの方がよっぽどだけだね」

「ええー、そんなことないよ！」

「そうかしら、私はコウタがあんな本読む気持ちも少しわかるわよ」

「うう…酷いよティア！」

「あははは」

ティアナは気付いてなった、コウタが『あんな本』を読んで対策を考へてる『ワガママ女』に自分もカウントされている事を…

「さて、キャロ頭洗おっか」

「お願いします」

思い出したようなスバルの言葉に、キャロが嬉しそうに返事をする。

「じゃあ、私は先にあがつてるからね」

「はい」

——六課・寮玄関付近——

「——クシュン！」

「コウタさん、風邪ですか？」

「…いや、そんな感じじゃないけど…」

「キュツクル？（大丈夫？）」

「うん、大丈夫」

俺とエリオは、シャワーを終え女性陣を待っていた。

「皆、遅いなあ…」

「女の入浴は長いもんだよ…ニムでもやるか？」

そういつて、俺はポーチから小さな鉄の玉を一握り取り出す。

「ニム…ってなんですか？」

…この世界にはないのかな？

「簡単なゲームだよ、この玉を交互に取り合って、最後の一つを取った方が負け。一回に取れる玉は3つまで、簡単だろ？」

「なるほど…」

「時間つぶしにはちょうどいいさ」

「キュキュキュル！（私もやる！）」

「じゃあフリードも一緒にやろう」

こうして二人と一匹の小さな戦いは幕を開けた。

「えと…これを取って…次にフリードが」

俺の前で真剣な表情で考えるエリオ。ちなみに現在までの戦績は俺が2敗、エリオが3敗、フリード2敗だった。

上手い具合に勝率調整できたな…どっちも素直というかなんというか…読みやすい。

エリオの目の前には6つの玉…まあエリオが3個取って、フリードが2個取って俺の負けかな？…エリオに負け越させるのもかわいそうだし…

「よし！これで…」

エリオは3つ玉を取り、フリードの番、

「キユイ！」

フリードは玉を『1つ』取って俺に回す…どうやらフリードは俺の味方らしい…ごめんエリオ。

目の前で裏切られたような顔をしているエリオ…すると

「アンタ等…なにやってるのよ？」

良いタイミングでティアが現れてくれて、お開きにする。

—— ベルカ自治区・聖王教会 ——

広い部屋の机で、一人の金髪の女性が書類を書いていた。

「騎士カリム、騎士はやてがいらっしやいました」

モニターが現れ、赤髪の女性が声をかける。

「早かったのね…私の部屋に来てもらって頂戴」

カリムは、書類から目を離さないまま答える。

「はい」

「それと、お茶を二つ、ファーストリーフの良い所を、ミルクと砂糖付きでね」

「かしこまりました」

「…よしつと」

書類を一段落させペンを置く。

—— コンコン

「どうぞ」

カリムの声にドアを開け、はやてが入室する。

「カリム…久しぶりや」

「はやて、いらっしやい」

二人は、少し雑談をした後テーブルへ移動し、部隊の話始める。

「ごめんな、すっかりご無沙汰してもうて」

「気にしないで、部隊の方は順調みたいね」

「ふふ、カリムのおかげや」

「ふふふ、そういうことにしておくと、色々お願いもしやすいかな」

「なんや？今日は会って話すのはお願い方面か？」

「……」

カリムは真剣な表情になり、端末を操作しカーテンを締め、モニターを出す。

「これ…ガジェット…新型？」

「今までの？型のほかに二種類。戦闘性能は、まだ不明だけど…これ、？型は割と大型ね。…本局にはまだ正式報告はしてないわ、監査役のクロノ提督には、さわりだけお伝えしたんだけど…」

「…！？これは！」

はやてはモニターに映る一つの物体を見つけ、表情を陰しくする。

「それが…今日の本題。一昨日付で、ミッドチルダに運び込まれた不審貨物…」

「…レリックやね」

レリック…機動六課設立のきっかけの一つで、超高エネルギーの塊であるロストロギア

「その可能性が高いわ。？型と？型が発見されたのも、昨日からだし」

「ガジェットがレリックを見つけ出す予想時間は…？」

「調査では早ければ今日明日」

その言葉にはやては少し考えるようなそぶりを見せ…

「せやけど…おかしいな。レリックが出てくるのが、ちょう早いよ  
うな…」

「だから会って話したかったの…これをどう判断すべきか、どう動くべきか…」

「……」

「レリック事件も…その後起こる事件も…対処を失敗するわけには…いかないもの」

思いつめたようなカリムを見て、はやては手元の端末を操作しモニターを閉じ、カーテンを開ける。

「はやて？」

「まあ…なにがあってもきつと大丈夫！カリムが力を貸してくれたおかげで、部隊はもういつでも動かせる。即戦力の隊長達はもちろん、新人フォワード達も実践可能…予想外の緊急事態にも、ちゃんと出来る下地が出来ている…そやから大丈夫！！」

—— はやては言葉を紡ぐ… カリムを元気づけるように… 自身を  
奮い立たせるように ——

## 第十五話「教会と初出勤??」（後書き）

……デバイスすら登場してないという体たらくorz

主人公の設定が少し明かされました…主人公は自分の優先順位を他人よりかなり下に置いているため、自分の事を言われても怒ったりはしませんが、友達や仲間の事になると自分への被害は度外視で行動します。ちなみにレジアスに助けられたのも8回のうちの1つです。

yukiさん、あけましておめでとございます。今年もいい年でありますように〜

ジョン１１７さん、感想ありがとうございます。チンクフラグは中盤〜後半の主人公の大きな転機となる場面になる予定です。

## 第十六話「教会と初出勤？」

発見される新型ガジェット…

現れたレリック…

動き始める大きな欲望…

裏にある様々な思惑…

それを知らないまま、俺たちの戦いは始まる。

魔法少女リリカルなのはStrikers（孤独の歌）が始まります。

### —— 六課・デバイスルーム ——

「うわぁ…これが…」

「私達の…新デバイス…ですか？」

俺達の前には、5つのデバイスが浮いている。ちなみに俺の前には翡翠色…俺の魔力光と同じ色のネックレスが、浮いている。

「そうです。設計主任は私…協力者は、なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長…そしてコウタ」

「ええ！コウタも！？」

シャーリーさんの言葉に驚くスバル…

「っていつても…俺は自分のとスバルの以外には、殆ど関わってないと思いますけど？」

「いやいや、一番難航してた、その二つを手伝ってもらって助かったよ。特にスバルのデバイスに関しては、むしろコウタの方が主導だったしね」

「そうなの！？コウタ」

シャーリーさんの言うとおり、スバルのデバイスに関しては基本設計部分から手伝っていた。まあ元々大分ガタが来ていたし…そのうち作り変えてやるつもりだったから色々考えてはいた。

「そんなことないですよ…基本設計部分は、その内作り直してやるつもりだったので…色々考えてただけですよ。それにウィングロードの解析や、AI部分に関しては俺ではどうする事も出来なかったです」

「……」

実際、あの特殊な魔法を解析してしまうシャーリーさんはさすがだ  
と思う。

って…うん？スバルが肩を震わせている…そして、

「コウタ……ありがと……！？」

感極まったのか、スバルが俺に飛びついてくる。

「引っ付くな！離せ！」

「やだ！」

「なんで！？」

「絶対に！やだ〜！」

俺の言葉にますます抱きつく力を強めるスバル…引きはがそうとし  
てもまったく離れない。

「いい加減に…てか、力つよ！？」

「〜」

俺の体から、ミシミシ不快な音が聞こえる。

「…は、離せ…お、折れる…ホントに…折れる…」

「〜」

い…意識が…

「スバル…そろそろ離さないと…コウタ死ぬわよ」

「え？…あっ！？ごめんコウタ、嬉しくってつい」

「…お前…」

怒る気力もない俺…あと少し遅かったら…マジで気絶してたかも、  
ティア…次はもう少し早く頼む。

「コウタさん…大丈夫ですか？」

キヤロとエリオが心配して声をかけてくれるが…

「そう…思うなら…止めてくれ…」

「…ごめんなさい、無理です！…」

二人とも、この二週間ですいぶんはつきり言えるようになって…嬉しいやら悲しいやら…

「まあコウタは置いて…皆自分のデバイスのところに戻ってあげて」

シャーリーさんが、俺のところに集まってた皆を戻す…置いとくなよ…

「あれ？そう言えば、ストラーダとケリュケイオンは変化無しなのかな？」

「そう言えば…そうなのかな？」

元の位置に戻ったエリオとキャロが、デバイスの外見が変わってない事に残念そうに声を出す。

「違います！変化無しなのは外見だけですよ！」

「リインさん…」

「はいです」

するとリインさんが、エリオとキャロの前に行き、説明をする。

「二人はちゃんとしたデバイスの使用経験はなかったですから、感触に慣れてもらうために、基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです」

「あ、あれで…最低限！？」

「…本当に？」

リインさんの言葉に驚愕する二人。

「皆が扱うことになる五機は、六課の前線メンバーとメカニックス  
タッフが、技術と経験の粋を集めて完成させた最新型。部隊の目的  
に合わせて、そして…エリオやキャロ、スバルにティアにコウタ、  
個性に合わせて作られた…文句なしに最高の機体です！」

リンさんは、浮いてるデバイスを自分の周りに集め、話を続ける。

「この子たちは…皆まだ生まれたばかりですが、色んな人の思いや願いが込められて、いっぱい時間かけてやっと完成したです」

そう言っただけでそれぞれの前にデバイスを移動させる。

「だから…ただの道具や武器と思わないで、大切に…だけど性能の限界まで、思いっきり全開で使ってあげて欲しいです！」

「この子たちも、きっとそれを望んでいるから…」

リンさんの言葉にシャーリーさんが付け足す。

「ごめんごめん、お待たせ」

図ったようなタイミングで、なのはさんが入ってくる。

「ナイスタイミングですよ、なのはさん。丁度今から機能説明をしようかと…」

「そう、もうすぐに使える状態なんだよね？」

「はいです！」

タイミング良すぎないか？…外でタイミングうかがってたんじゃない？…

「コウタ…何か言いたい事でもあるのかな？」

「!?!? いえ、なにもありません!」

この人…心が読めるのか!?

シャーリーさんは何事もなかったように、それぞれのデバイスの画像をモニターに出し、説明を始める。

「まず、その子達皆何段階かに分けて、出力リミッターをかけてあるの。一番最初の段階だと、そんなにビックリするほどパワーが出る訳じゃないから…まずはそれで扱いを覚えていって」

「で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら、私やフェイト隊長、ラインやシャーリーの判断で解除していくから…コウタは、自分で解除できると思うけど…しないようにね」

「…しませんよ」

俺をどういう風に見てるんだこの人…

「あはは…丁度、一緒にレベルアップしていく感じですね」

…ラインさん…貴女も無視ですか…

「あー出力リミッターっていうと…なのはさん達にもかかってますよね」

ティアがなのはさんの言葉に反応し返す。…お前も間のやり取りは無視か…

「ああ…私達は、デバイスだけじゃなく、本人にもだけどね…」

「!？」

「『『『ええ!？』』』」

なのはさんの言葉に四人は驚き、俺は別の意味で驚いていた。…あの輪っかみたいなのは…リミッターだったのか…

「リミッターがですか？」

「能力限定って言って…うちの隊長と副隊長は皆だよ。私とフェイト隊長、シグナム副隊長にヴィータ副隊長…」

「はやてちゃんもですね」

「うん」

…なるほど納得がいった。つまりは…

「それってつまり、部隊の保持ランク統計規模の調整ですか？」

「うん、そうだよ」

「え〜っと…」

俺の言葉になのはさんが答える。キャラはよく分かってないようである。考えるようなくさを見せる。

(コウタ!それってなに?)

（おい…訓練校で習ったろ…この後説明があると思うから、しっかり聞いてろ）

（あ、あはは…）

忘れてやがるな…しっかりしろよ訓練学校主席…

「コウタの言うとおり、部隊ごとに保有できる魔導師ランクの統計規模ってというのが決まってるね」

「一つの部隊で、優秀な魔導師をたくさん保有したい場合は、そこに上手く収まるように魔力の出力リミッターをかけるんですよ」

「まあ…裏技っちゃあ…裏技なんだけどね」

シャーリーさんの言葉に、リインさん、なのはさんが続ける。…裏技以前にリミッターをかけたたりできる人が、そもそも少ないような…

「うちの場合だと…はやて部隊長が4ランクダウン、隊長達は大体2ランクダウンかな」

「4つ！？八神部隊長って…SSランクのはずだから…」

「Aランクまで落としてるんですか？」

Aランク…ってことは、普通の部隊の分隊長レベルくらいか…

「はやてちゃんも…色々苦労しているです…」

「…なのはさんは？」

「私は…元々S+だったから…2.5ランクダウンでAA。だからもうすぐ、一人で皆の相手をするのは辛くなってくるかな」

…なるほど、俺の目に映ってる3つの輪っかは、大きいのが1ランク、小さいのが0.5ランクのリミッターか…

「隊長さん達ははやてちゃんの、はやてちゃんは直接の上司のカリムさんか、部隊の監査役のクロノ提督の許可がないと、リミッター解除が出来ないですし…許可は滅多なことでは出せないそうです」

もし…解除しなければ勝てない相手と戦って…解除の判断が遅れれば…

「…そうだったんですね」

「まあ…隊長達の話は心の片隅くらいでいいよ。今は、皆のデバイスの事…」

「………はい」

…まあ俺が考えたところで、どうにもならないか。

シャーリーさんが、デバイスの詳細データを表示して、説明を続ける。

「新型は、皆の訓練データを基準に調整されているから、いきなり実戦で使っても違和感はないと思うんだけど…コウタのだけは、近接戦闘での耐久力の関係上、前の物に比べ重量が1.5倍くらいになってるから…注意してね」

「分かりました。その位になるだろうと思ってたので、大丈夫です」

「午後の訓練の時にテストでもして、微調整をしようか？」

「遠隔調整も出来ますから、手間は殆どかからないと思いますよ」

「ふう…便利だね、最近は」

なのはさんがしみじみ話す…レイジングハートは遠隔調整できないんだろうか？

「べんりです」

あ、そういえば…

「そうだ、スバルのやつは、リボルバーナックルとのシンクロも出てくるはずだから、収納と瞬間装着も出来るようになってるはずだ」

「本当！？ありがとうコウタ！シャーリーさん！」

前々から、持ち運びが面倒だと言っていたので、シャーリーさんに相談して機能を付けてもらった。シャーリーさん曰く簡単にできたらしいが…

はやてを送ったフェイトは、車内でビクアーチ副官のグリフィスと通信をしていた。

「——うん、はやては向こうに送ったから…そろそろ会談が始まってるんじゃないかな？」

「はい、お疲れ様です」

「私はこの後、公安地区の捜査本部に寄って行くと思うんだけど…そっちはなにか急ぎの用事とかあるかな？」

「いえ、こちらは大丈夫です。副隊長お二人は、交替部隊と一緒に出勤中ですが…なのはさんが隊舎にいらっしゃいますので」

「そう…え!？」

フェイトが通信を切ろうとした瞬間、車内にモニターが現れアラートが鳴る！

デバイスの説明が終わり、退出しようとした頃。室内にアラートが響いた。

「このアラートって…」

「一級警戒態勢!？」

「グリフィス君!」

なのはさんの声に、モニターが現れグリフィス准尉が写る。

「はい! 教会本部から出動要請です!」

「なのは隊長! フェイト隊長! グリフィス君! こちらははやて!」

もう一つのモニターが写り、八神部隊長が写る。

それとほぼ同時に、フェイトさんからも通信が入る。

「こちらフェイト…状況は?」

「教会調査団で追っていたレリックらしきものが見つかった。場所は、エイリム山岳丘陵地帯…対象は山岳リニアールで移動中」

「移動中って!」

「まさか!」

部隊長の説明に、フェイトさんとなのはさんが驚いたように聞き返す。現在は隊長達の作戦確認中なので、俺達は黙っている。

「そのまさかや…内部に進入したガジェットのせいで、車両の制御が奪われてる…リニアレール車内のガジェットは最低でも30体…大型や、飛行型の未確認タイプも出ているかもしれへん」

未確認タイプ…新型ってことか…

「いきなりハードな初出勤や…なのはちゃん、フェイトちゃん…いけるか？」

「私はいつでも！」

「私も！」

「スバル、エリオ、キャロ、ティアナ、コウタ、皆もオツケーか？」

「……はい！」「……」

「よし！良いお返事や。シフトはA-3、グリフィス君は隊舎での指揮、リインは現場管制！」

「「はい！」「」

「なのはちゃんとフェイトちゃんは現場指揮！」

「うん！」

「ほんなら…機動六課フォワード部隊…出動!!」

「…………はい!」…………

「了解…皆は先行して、私もすぐに追いかける!」

「うん」

フェイトさんの言葉に部隊長が応え、俺達もヘリポートへと急ぐ!

——聖王教会——

「シャッハ!はやてを送ってあげて…機動六課の隊舎まで最速で!」

「かしこまりました!騎士カリム!」

カリムの言葉に応え、モニターが消える。

「聖堂の裏に出て…シャッハが待ってる」

カリムの言葉にはやては身支度をしながら返事をする。

「おおきにな、カリム…今日のお茶、おいしかったよ」

「ふふふ…」

「ほんなら…行つてきます！」

——機動六課・ヘリポート——

俺達がヘリポートに着くと、すでにヴァイス陸曹が準備をしていてくれたので、急いで乗り込む。

「新デバイスで、ぶつつけ本番になっちゃったけど…練習通りで大丈夫だからね」

「はい」

「頑張ります」

なのはさんがスバルとティアに話しかけ、二人が答える…さすがに緊張してるみたいだ。

「エリオにキャラ、それにフリードもしっかりですよ！」

「「はい！」」

「キユクウ！（はい！）」

…俺忘れられてね？…なんか今日無視されることが多い気がする。

「危ない時は、私やフェイト隊長、リインがちゃんとフォローするから、おっかなびっくりじゃなくて、思いっきりやってみよう！」

「「「「はい！」」」」

——こうして、レリックをめぐる戦いが始まった——

## 第十六話「教会と初出勤??」（後書き）

ふう… やつと原作で言うところの4話が終わった…

5話は戦闘メインだし… テンポ良くいくといいなあ…

会話をテンポ良く進めないと恐ろしく長引くため、主人公の会話をあまり入れれない… 戦闘になれば心理描写も増やせるかな？

Yukiさん、いつも感想ありがとうございます。

黎音さん、感想、ご意見ありがとうございます。これから読み始める方のためにさっそくその部分は訂正させていただきます。これからは何かお気づきの点があればよろしくおねがいします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6348z/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS～孤独の歌～

2012年1月4日05時49分発行